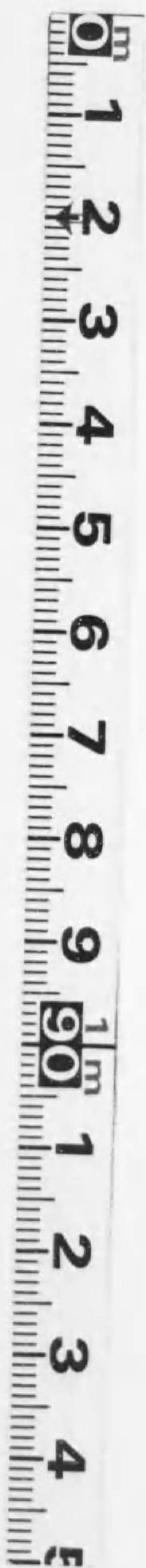


500

26



始





坪内逍遙
渥美清太郎
共編

歌舞伎脚本傑作集 第四卷
五瓶

青楼詞合鏡
河原噂京談
月武藏野繩狂言

おそんの五太力



三浦屋



三五大切の五人

三五大切
〇
〇

500-26

歌舞伎脚本傑作集

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

第四卷

大正
10 8.29
内交

東京春陽堂發行

緒言

本巻の口繪及び挿繪に關しては、特に讀者諸君の諒恕を乞はなければならぬことがあります。本巻に收容した作は、三つともに、其の傳寫本が乏しく、本文の校讐其事にだけさへも随分骨が折れたのでしたが、とりわけ、其後復演されたことが、其一はたつた一度ぎり、其外は、只の一度さへもなかつたといふ關係上、其書きおろし當時、即ち上演當時の舞臺面をえがいた役者錦繪が、前三巻のやうには——百方搜索に手を盡したのでしたが——手に入らなかつたのです。殊に、原版さながらに複製して掲げるに適當した口繪用のが見附からなかつた。て、據らなく、「青樓詞合鏡」の本文中の或せりふにも、又其作意にも緣故のある同じ作者の傑作「五大力」が、江戸で初めて演ぜられた時以來の役割の錦繪を以て其の埋め合せとすることにしました。源五兵衛は三代目澤村宗十郎で、小萬は三代目瀬川菊之丞（仙女路考）です。

此二枚つゞきは、多分、寛政十年十月再上演の際の舞臺面をえがいたものらしく、初代豊國が役者肖顔繪の書家として、彼の勝川一派に代つて其名聲を高めはじめた頃です。が、其實、彼れとしては、其筆力の絶頂期であつた。といふのは、此時分から彼れの畫は、漸く一種のマンナリズムに流

れかけ、享和年代を越えたのを界に、譬へばだら／＼坂を降るやうに向下し、遂に彼の文化文政期の大墮落に及んだのでした。だから、此二枚つゞきは、彼れが畫風の追分け道を標示してゐるものどもいへる。随つて、既刊三冊の口繪などに比べると、畫としてはずつと雅趣に富んだものです。とりわけ第三卷の七世團十郎の時平の像などに比べて御覽なさい。著しい優劣でせう！殊に、宗十郎、菊之丞以外の人物の描き方に現れてゐる筆致が面白い。何となく歌麿式なところが見えるのが面白い、美人畫に於て歌麿の影響を蒙りつゝあつた頃だからであらう。

ところが、繪が二枚つゞきである上に、既刊三卷のに比べると、人物の頭数もずつと多いので、彫刻の上にも、色刷、其他の上にも、前々のとは比べ物にならぬ程の手数や費用が懸つたと、出版書肆はいつてゐます。其骨折りを買つてやつて下さい。

これで、理合せだけは出来たやうに思つたものゝ、また何だか物足りなく感ぜられたので、編者は更に、景物として、關西に於ける、多分、最古の、或は最初の「顔見世番附」であらうと推測せられるもの一枚と、「足利御免歌舞伎事始」といふ珍しい劇の——關東には例のない——縦長の看板繪式の番附をも添へておきました。これは第三卷の緒言中に鳥渡解説しておいた大阪の愛書家永田有翠君の珍藏に係る番附集（天明元年から文化九年までの）中に收めてあつたものを借用したのです。「足利御

免」のは、一枚を上下に繼ぎ合せて見て下さい。これは天明三年正月に大阪の中座で上演されたもので、五瓶が「けいせい黄金鋪」を角座に書きおろして上演させたと同年の作で、彼れの時代の劇の片影であるといへる。

校正は、相應に努力した積りですが、送り假名の内則其他、まだどうも一定しにくい理由があつて、何かと不規律な失がありませうが、これは、原書の甚しい亂脈、蕪雜が、局外から想像なさる以上であると同時に、生中、原作の氣分や形式やを、印刷の體裁によつて傳存しようとしたわれ／＼の註文が、大きな無理であつたのに原因するのだとして、御諒恕下されたい。

大正十年七月初旬

「河原噂京諺」は、並木五瓶が、死去より、二年前、即ち文化三年の一月、長い間の関係がある市村座へ書きおろしたもので、「梅柳魁會我」の二番目狂言であるが、此時は珍らしく二番目を一日替りとして、「略三五大切」(小萬源吾兵衛の書替へ)と一日交代に演じられ、「河原噂京諺」は其後日の部であつた。二幕目の、鬼瓦と鍾馗瓦の件が、新規な舞臺装置と助高屋高助の老巧な藝と瀬川路之助の眞摯な藝とで、特に好評を受けたらしい。が、此狂言は此時一度きりて、後には演ぜられなかつた。小吟、彦三は、院本「替唱歌糸の時雨」から、只役名を借りただけで、同院本と別に關係は無い。

五瓶は、自分と長い間提携して居た三世澤村宗十郎が死んでからは、其遺子を守立てつゝ、五世松本幸四郎に屬して市村座に居つたので、此狂言で彦三を勤めて居る澤村源之助が、即ち三世宗十郎の遺子であつた。五瓶は新脚本を書く度びに、源之助に儲かるやうな役を振つて、人氣を引立てたので、源之助も大いに賣り出した。若いながら、間もなく四世宗十郎を相續するまでになつたのは、全く五瓶の力で、此點は默阿彌と左團次との關係に似て居る。役割りは、次の通りであつた。

黒木屋番頭半兵衛、筒井重三母お高、山伏奇妙院は助高屋高助、黒木屋彦三は澤村源之助、髮結ひ松の尾新兵衛は澤村東藏、幫間勘九郎は嵐新平、藪醫者増田有宅は松本小治郎、座頭ねぶ市は

中島百右衛門。黒木屋手代松兵衛は坂東傳吉。新門前の權七は市川萬藏。常間伊吉は大谷候兵衛。
 井筒屋源兵衛は櫻山連藏。筒井の手代久三は市川栗藏。立花屋米藏は市川米藏。黒木屋丁稚岩松
 は澤村紀次。井筒屋下女お岩は中山岩次郎。仲居お藤は松本團三郎。富田屋お春は中山常次郎。
 大原の牛飼ひ五郎吉は市川團十郎。梅園の家臣桂佐市は花井才三郎。二軒茶屋お澤は瀬川吉三郎。
 白人都是中村春之助。千鳥濱右衛門は市川宗三郎。鴨の長兵衛は中山七藏。黒木屋の手代惣八は
 松本武十郎。表具屋太郎兵衛は市川門十郎。筒井の手代金六は嵐冠十郎。筒井重三郎は尾上榮三
 郎。新兵衛女房おせんと彦三女房お路とは瀬川路之助。井筒屋の小吟は瀬川路三郎。黒木屋大隅
 は尾上松助。半兵衛女房おりくと扇九の仲居お富とは中山富三郎。坊主小兵衛と小和田屋又助と
 は松本幸四郎。



掛け聲にて幕明く。

扇屋のしよの道りの家阿三 止二ツカ見オオヤウに掛け 大才入り相掛の合ひ大 猪尾 扇九回奉の

河原噂京諺

幕

富田屋二階の場
祇園二軒茶屋の場
四條河原の場

登場人物

黒木屋彦三、黒木屋番頭、半兵衛。髪結び、松の尾新兵衛。幫間、勘九郎。筒井手代、金六。醫者、増田有宅。井筒屋徳兵衛。坊主の小兵衛。井筒屋小吟。筒井の母、お高。千鳥濱右衛門。新兵衛女房、おせん。表具屋、太郎兵衛。

造り物、平舞臺見附、一面の塗り骨障子。舞臺前折廻しに高欄、下の方に二階の上り口の切り穴、これを出入りにして、上の方に振りよき柳の枝、見事に半ば梢を見せ、方々に雪洞附きの燭臺数多とし、總て繩手引込み富田屋二階の模様にて、幕の中より上方炬燵に、黒木屋彦三、ろび、煙草のんで居る。其櫓に腰かけて、井筒屋の小吟、端手なる女郎の拵へにて、長い文を讀んで居る見得。正面に藪醫者増田有宅、幫間、勘九郎、兩人拳を打つて居る。花車お春、仲居お藤、外に富田屋の娘、幫間伊吉、酒を飲んで居る。真中に衣桁を直し、これに黒縮緬、紅絹裏の頭巾、執菊と菊蝶の比翼紋付き、同じくお高祖頭巾にも右の通りの紋付き、此二つを見えるやうに掛け、大小入り相撲の合ひ方。宥宅、勘九郎拳の掛け聲にて幕明く。

勘九 ドッコイ、無いぞ。ヨイヤサ。(ト手を擴げる。)

宥宅 南無三。又負けた。
はる ほんに、宥宅様は、餘ッ程弱いかして、續けて三遍お負けなさるとは、御人體にも似合はぬ。ち
と

ふじ お嗜みなされませいな。

娘 宥宅様は口程にも無い。あの伊吉さんにも、負けてばつかり、居やしやんすわいなア。

宥宅 コリヤ、其様にさみ致すな。おれはあの彦三殿に附添ひの、増出宥宅といふ町醫者、勘九郎は祇
園町の男藝者、同じ者でも、長袖と袷間。それで拳には負けるのぢや。

ふじ 宥宅様、さういふのが眞の負け惜み。

宥宅 さういふな。拳よりは腕づくで。(ト胸まくりして立たうとするを)

伊吉 オット、待つたり。此勝負は行司預り。

ふじ 流石は大津屋の伊助さん。こりや出来たわいなア。

伊吉 出来たついでに、今日は彦三様と小吟様の、アレ、あの比翼の頭巾開きの、御祝儀の酒宴なれば、
宥宅 それで洛東引込みの、富田屋が許の立て酒を、

勘伊 飲めや唄へや、一寸先きは闇の夜、わいくのわいとな。

ト騒ぎ唄になり、兩人立上り、踊る。彦三酒飲むを小吟留る。宥宅小吟を留る事よろしくあつて

彦三 サア、面白うなつた。これからは、何ぞ珍らしい、遊びの趣向は無いか、宥宅老。

娘 伊吉さん、何ぞ面白い思ひ付きな事をしなさんせいなア。

宥宅 今宵はどうしたのか、とんと浮かぬて。

伊吉 アレ、月は河原に浮んであるに。

彦三 いつそ探題の發句合せを催さうか。

宥宅 但しは阿彌陀の光りはどうであらう。

伊吉 そりや古風な遊びぢやな。

勘九 オット、よし。此勘九郎が思ひ付き。旦那、アレ、御覽じませ、假り橋の人通りを。爰から

滅多無性に名を呼んで、こちら向かせて、見ようぢやござりませぬか。

彦三 こりやよからう。小吟も機嫌直して、お春も、仲居も、思ひ付きの名を呼んで見い、呼んで見い。
はる アイ。そんなら私等も呼びませう、小吟様。

小吟 イエ、私。

皆々 ハテ、マア、ござんせいなア。

ト皆々小吟を無理に連れて、高欄へ立ちかゝり

宥宅 何ぞ拍子が無けりや呼び惜いが。

勘九 そりや知れた事。砧の合ひ方、弾いたりく。

彦三 おれは其間に。(ト井を取上げ) ついだりく。

伊吉 合點ぢや。飲んだりく。

トこれよりナリくの砧の合ひ方になり、彦三酒飲むを、小吟つかくへ行つてとめる。お春なだめる。

此仕組み、言ひ合ひにて宜しくあるうち、土間の通ひ路へ座頭れぶ市、杖をつき出て来て

れぶ 按摩、けんびき。

ト通りかゝる。本舞臺にて

勘九 アレく、今通るのは慥かに按摩。しかも座頭の

伊吉 もみ市か。但しは、鈴市かアい。

ふじ それはあんまりおしずいあん(押推案?)さんすいなア。

トれぶ市かまはず

れぶ 按摩、けんびき、鍼の療治。

ト探りく花道を切り、幕の中へ入る。あとへ新門前の権七、前髪にて出て、何なりと義太夫節一口語

つて行くを、平舞臺より

ふじ アレく、慥かに義太夫節語つて通る前髪。

宥宅 表具屋の又三郎。こちら向かねば、娑婆て見た彌二郎やアい。

ト権七かまはず切り幕へ入る。次へ道心者坊主、鉦を叩いて念佛申して出る。

勘九 アレ、道心者なら、知れた、西念か。

娘 願哲様ではないかいなア。

道心 南無阿彌陀佛、々々々々々々。

トかまはず入る。此間砧の合ひ方。土間へ茶屋の男、何ぞ持つて出る。

ふじ あれは近所の茶屋の男衆。

勘九 茶屋なれば、オイ、平野屋、々々々。

宥宅 コリヤく、越前屋、々々々。……でもないさうな。

ト此内通ひ路へてんくと思ひ附きの仕出し、途切れなく出て入るを、舞臺よりそれんくの名を呼ぶ事

よろしくある。彦三は此うち小吟と口舌くちせつの模様、程よき所にて、黒木屋番頭半兵衛、着附け、羽織にて、頭巾を着て、花道の通ひ路を静かに出て来る。花道の切り幕より、番太郎、提灯金棒引いて出る。通ひ路にて半兵衛と行合ひ、「何時なんどきぢや」と時を聞いて居るうち、本舞臺にて

伊八 もう餘ッ程夜が更けたさうな。假り橋もひつそりと。

勘九 イヤ〜。アレ、一人何やら番太郎に聞いて居るは、慥かに何時なんどきといふことであらう。

宥宅 何時なんどきなりや、もう四つ半兵衛々々々。

皆々 オ、イ、半兵衛殿、々々々々。

ト呼び立てる。半兵衛、番太郎に別れ、本花道へ上り、本舞臺を見て、うなづき、ツイと切り幕の中へ入る。

勘九 アレ〜、今呼んだ半兵衛が當つたやら、うなづいて行きました。

宥宅 これが今夜の巻頭ぢや。

伊八 祝うて一つ、締めませう。

皆々 ヨイ〜、ハアヨイ。(ト手を打つ。)

宥宅 サア、酒ぢや〜。

彦三 酒は今お春が替へに行た。早うといへ〜。

ト無性に手を叩く。切り穴よりお春、銚子を持ち、上つて来て

はる 申し、皆さん、今假り橋を通つた男が来てぢやわいなア。

皆々 ヤア、何ぢや〜。

はる サア、爰の二階から半兵衛、半兵衛と、おれが名を呼んだは誰ぢや。何の用ぢやとねだり口。何とていつて歸さうぞいなア。

勘九 そんなら今の半兵衛が来たか。これは有り難い。何と、旦那、お聞きなされましたか。

宥宅 コリヤ、勘九々々。其男を是非二階へ引摺り上げ、一生飲まぬ立て酒に、酔はしたらどうであらう。

彦三 そりや金づくではならぬ慰みぢや。早う〜。

宥宅 ソレ、お春、早う呼んで〜。

はる 大事ないかえ。

勘九 ハテ、大事な。半兵衛々々々。

皆々 半兵衛さん〜。

ト呼び立てる。切り穴より

半兵 オツト、合點あつてん。それへ参りませう。(ト上へ来て) 皆御免なされませ。

ト頭巾を取る。彦三、半兵衛を見て

彦三 ヤア、そちや番頭の半兵衛。

半兵 若旦那彦三様。

宥宅 そんならこなたが、番頭の半兵衛殿か。

勘九 アノ、お前が、半兵衛様か。

曹ヤ ヤア。(ト胸をつぶす。)

半兵 こなお人は、半兵衛々々々と、いかう半兵衛を珍らしがらつしやるは、エ、聞えた。こなたが勘九郎といふあいつ番間殿ぢやの。(ト宥宅を見て) こちらのが若旦那と合ひ口の、お醫者増田宥宅様であらう。いつぞやから逢ひたいと思つて居たに、こりやよい所でお目にか、つた。きつとお禮を申さしやなりません。(ト又小吟を見て) そちらの女中が、これも聞き及んだ小吟殿さうな。こなさんにも、とつくりお禮を

彦三 コリヤ、半兵衛。此小吟や勘九郎に禮いふとは何の禮。自體おれが面白う遊んで居る此二階

へ、何用あつて来た。いかに番頭ぢやというて、推參な。遊びの邪魔になる。きりく立つて、歸れく、

半兵 イヤ、歸りますまい。

彦三 何と。

半兵 私しは用事は無けれど、此二階から、半兵衛々々々と呼ばれたは、何ぞ用があらうと思つて、それて来ました。

彦三 イヤ、さういうて己おれには是非歸れと、古くさい異見に來たのであらう。コリヤ、そんな事はナ、近松門左衛門時分の淨瑠璃本にある。異見なりや、よしにせい。

ト始終辭つて居るこなし。半兵衛思ひ入れあつて

半兵 したり。強しく。わるい事でも、善い事でも、それ程に性根を据えねば、男とはいはれぬ。流石町人でも黒木屋大隅と呼ばれる、人の息子殿程あつて、頼もしい。此半兵衛も、有りやうはお前を尋ねに、祇園町の扇屋へ行てもござらぬゆゑ、すぐくと歸りがけ、假り橋にて呼びかけられ、もしやと思つて爰へ来て、お目にか、つたは、願つても無い幸ひ。

彦三 コリヤ、富樓那ふろうなの辯を揮つて己おれを無理やりに理窟詰めにして、家へ連れて歸らうとは、手の見え

た狂言。さういふ事では此彦三は行かぬ。オ、慮外ながら、ナア、皆の者。ハ、、、。半兵衛にかまはずと、酒にせうく。小吟、つぎやれ。(ト又盃を取りあげる。)

小吟 ア、もうし、それではあなたの手前、もう酒はよしにして、ちやつと内方へ。

半兵衛 イヤ、連れては歸りませぬ。やつぱり爰て若旦那の太鼓を持つて、色里の酒一つたべて見たい心。

彦三 ムウ。そんなら異見では無うて

半兵衛 氣晴しが致したい。

彦三 コリヤ、大分粹な事をいふが、どう心が入れ替つて、番頭殿の

皆々 サア、其譯は。

半兵衛 ハチ、家に居て親旦那の述懐と、娘御の愚痴を聞いて、心がじめく。ところで、思ひがけなう今初めて、此二階へ上つたれば、どこともなしに花やかで、氣がわつさりになつて來た。若旦那をはじめ皆も聞いて下んせ。何ぼう金持ちでも、町家といふものは、夜などは猶の事、とんと持てるものではない。成程、思へば、お若い彦三様が、ちよつと出ても歸らずに、居續けにござる筈。内が持てぬといふ譯は、こちらの親旦那は、名は大隅でも大の野暮、あれほど發明な若旦那を、

阿呆か子供のやうに思つて、お留守のうちにも、娘御のお路様をとらへては、彦三様の事をいつては案じ、面白う此やうに騒いでござるのを知らずに、夜もろくに御寢ならず、口へ出してはおつしやらぬ、心の中の氣抜ひは、現はれるお顔の瘦。朝夕も味ないと、ろくろくにまわりもせず、お好きの謠ひの聲も聴かず、じめくとしてござるのもへト涙ぐみて、彦三を見て思ひ入れあつてサア、其内の陰氣さといふものが、堪へられたものではないワ。今夜も今夜とて、娘御におつしやるには、ア、彦三が家に居る晩には、圍ひに釜をかけて、茶ぢやの、酒ぢやの、又俳諧のと、隣りの筒井の息子殿や、友達衆を呼び集め、それはく賑やかに、陽氣であらうと思ふのに、あれが家に居ぬと閑古鳥、森の小鳥、夜の鶴、案じる親の事は思はずに、河東へ行て、酒に飲まれて先きから先き、戻り端知らぬ不孝な奴と思へども、天にも地にも、たつた一人の伴、可愛い、が矢ツ張因果と、あとは涙の雨やさめ。次の間て聞いて居る此半兵衛までが、お心根を思ひやつて、貰ひ涙に泣くは人情。思ひ廻せば勿體ない事ではござりませぬか。コレ、(ト彦三を見て、思ひ入れあつて、ム、ハ、ハ、ハ、とわざと笑つて) サア、斯ういふ親御の御心底ゆゑ、家には居られますまい。ナア、若旦那。此上は、半兵衛もろとも、此月中はおろか、今年中も居續けして、親御の事や娘御の事を、微塵も思はぬがようござります。どうやら夜更けの加減か、じめくと寒い風、

座敷も白けた。若旦那、わつさり酒にせうではござりませぬか。

彦三 イヤ〜。もう酒はよしにせう。酔ひがさつぱり醒めて、本性になつた。今の話、親仁様の苦になされ、夜もろくに寝られぬとは知らなんだ。父母在す時は遠く遊ばずと、論語にあるを、とんと忘れた。親の心を休めるため、小吟、おりや今夜は歸らうわいの。

小吟 さうでござんす。それでお路様へ文の義理も立ち、大切な親御様への御孝行。お春さん、ちやつとお駕をいひつけて下さんせいなア。

はる アイ〜、合點でござんす。お藤さん、お駕を早う。

ふじ すぐに呼びにやりませう。

ト下へおりるを見て、半兵衛わざと

半兵衛 イヤ〜、若旦那、此半兵衛は歸りませぬ。コレ、女子衆、酒はどうぢや。わつさりと吸ひ物がよからうぞや。

彦三 半兵衛。其方は居やつても、もう此やうに座が醒めては、酒は飲めるものぢやない。お春、駕はどうぢや。埒の明かぬ。

ト箱つうち、小吟羽織を着せ、紙入、脇差を渡す。彦三氣を急いで衣桁に掛けてある頭巾を冠り〜

彦三 皆、さらば〜。(トこなしあつて、切り穴へおりる)。

宥宅 これはしたり。忙しない。

勘九 もうし、旦那々々。

皆々 假り橋まで送りますわいなア。

ト伊勢音頭になり、宥宅、勘九郎はじめ皆々切り穴へおりる、時の鐘になり、小吟こなしあつて

小吟 私もちよつと

ト行かうとするを

半兵衛 待つた、小吟殿。

トとめる。合ひ方變り

小吟 何ぞ用がござんすかえ。

半兵衛 イヤ、外の事では無い。最前から見て居るが、あの衣桁に懸けてある帽子は、大方こなしさんのであらうが、鈍菊は知れた若旦那、又菊蝶は、どうしてお前が付けさつしやるぞ。

小吟 ほんに、變つた事を尋ねさしやんす。ありや私が母さんの定紋。此身に成り下つても付けて居るは、お側離れぬ、せめては心の孝行。

半兵 ムウ。そんならお前は、江州高橋の御家中、本間彌太夫様のお娘御、幼名はお菊様と申しませうが。

小吟 エ、それをどうしてお前が

半兵 知らいでならうか。以前の御家來、正木半兵衛めてござります。

小吟 そんなら、私が、小さい時に

半兵 お國を立退き、京へ來て、今では町家の奉公、黒木屋の番頭。

小吟 ほんに思ひがけない、以前の家來。

半兵 故主の娘御。眞に人の行方と、今は流れのお身の上。

小吟 憂き河竹に身を沈めしも、人に騙され、段々様子のある事。

半兵 ハテ、思ひがけない。

小吟 變つた所で

半兵 主従の名宣り合ひ。

ト膝を叩く。清掻になり、花道切幕の中より、提灯吊つた駕に彦三を乗せ、昇いて出て、通ひ路へ行く。本舞臺より小吟、ふと之を見て

小吟 アレ、今彦三様が假り橋を

ト半兵衛も向うを見て

半兵 エ、嬉しや。あれで親旦那のお喜び。

小吟 コレイナア、もうし

ト大きな聲にて、手を叩き、招く。彦三駕の中より本舞臺を見て、手にて、イヤ〜と仕方しい〜、駕昇いて東へ入る。小吟残り惜しさうに

小吟 アレ、もう橋を向うへ。

ト伸びあがるを、半兵衛引廻して

半兵 サア、あなたのお身の上、私しが身の上も

小吟 イエ〜、それよりは、彦三さんいなア。

ト伸び上り、招くを

半兵 ハテ、とつくりと、承りませう。

ト引廻して下に置く。これにて引返し、

幕

造り物、上の方に石の大鳥居。それより正面に二軒茶屋、藤屋の體にて、前に残らず綺麗なる腹腰を懸け、はる下の方に髪結床、障子に「新」の字の印し、紋づくしの暖簾。すべて祇園下河原の模倣宜しく、宮神樂に、豆腐を賣る聲、七草の音にて幕明く。
トお澤、お政、藤屋の女子にて、着附け、赤前垂にて並び、通る仕出しを呼んで居る。向うより下座より、仕出し出て、途切れぬやう、始終出入りあり。

さは 申し、此方へお上りなく。

まさ 奥座敷が綺麗でござりますわいな。サア、お上りなく。

さは あなた達もお寄りなされませいな。

まさ お早う致しまするわいな。

ト此うち始終宮神樂、七草にて、仕出し行き違ふ。よき程に、向う揚幕のうちバタ／＼にて、總栗坊主、破れ僧衣にて

小兵 ソリヤ、泥棒々々。

トいひ／＼逃げて出る。あとより新門前の權七、幫間伊吉、井筒屋徳兵衛追ひ駈け出て皆々 其奴が、泥棒ぢや／＼。

ト小兵衛は本舞臺へ来て、仕出しを突き倒し、「泥棒々々」と逃げ廻る。三人追ひ駈け廻る。仕出しも一

所に揉み合ひ、ト三人、小兵衛を捕へ、押し倒して

徳兵 サア／＼、泥棒めを捕まへた／＼。

仕出 ソリヤ、打ちのめせ／＼。

小兵 ヤイ／＼。汝等は愚僧を何て打つ。泥棒した覚えは無いぞ。

徳兵 覚えが無いとは野太いづく、にふめぢやわい。

權七 そして汝が泥棒しながら、矢ッ張り人の中を泥棒々々といつて逃げやアがる。太い奴ではある。

伊吉 コレ／＼、新門前の權七様。お前、祇園町から此坊主めを、泥棒々々というて追ッ駈けさつしやりましたゆゑ、おれも一しよに爰へ追ッ駈けて來ましたが、此奴はマア、何を盗みましたな。

權七 伊吉、聞いてくれろ。今おれが切り通しを通つたら、藝子を若い衆が新地へ送る所を、此奴が響

を抜きをつたわいの。それでおれは追ひ駈けて來たのよ。太い奴ではないか。

徳兵 昨日どんぐりの辻で、おれがはやみちを盗つたも此奴であらう。

仕出 打ち据えて、盗み物を、出させろ／＼。

小兵 ヤイ／＼、待て／＼。此尊い出家を、泥棒ぢやの、盗人ぢやのと吐かして、打ち叩きひろいだら、

罰があたるぞよ。

仕出 何の爵が。乞食坊主めが。

小兵 アレ又、乞食坊主と吐かす。愚僧も世にある時は、宮川町へ通うたぢいやく、院、そこをしくじつて鷹ヶ峯、それから嵯峨、御室、壇上を駈け廻つて、トゴのしまひが河原の蒲鉾。(トちよんがれの合ひ方になり、小兵衛端た錢を出し、錫杖のやうに振り)、ヤレ、聞いてもくんない。爰は都かお花に打込み、丁半ちよぼ一、歌留多は元より、博奕が達者に、成る程薄なる、宿無し坊主の、うるさいこんだに、ボン、ボン、ボン。

ト紛らして逃げうとするを

權七 ドツコイ。ちよんがれて紛らかし、爰を逃げうとは太い泥棒め。

伊吉 此奴が盗んだ簪があらう。皆寄つて探してもらはう。

仕出 合點ぢやく。サア、出しをらう。

ト多勢、つて小兵衛を手籠めにする。懐より簪、紙入、巾着、盗み物バラ、と出る。

徳兵 これ程持つて居て、知らぬとは泥棒め。

伊吉 イヤ、コレ、徳兵衛様。お前、其盗み物を、断りなしに取返しては、却つて難儀になりますぞえ。

徳兵 ほんに、さうぢや。幸ひ此祇園の下の山支配の所へ、此奴を連れて行て、取り戻してもらはう。

小兵 そんなら愚僧を。

伊吉 山へ連れて行くのぢや。

小兵 これは迷惑。

徳兵 大泥棒め。

小兵 山とは辛い。

皆々 うせアがれ。

ト、こんな事いひ、小兵衛を權七、伊吉、徳兵衛皆々寄つて、鳥居の中へ連れて入る。すぐに祇園囃子になり、向うより小吟、白人、都、お春、お藤、若い者一人附添ひ出て來り、本舞臺へ來る。

さは これは、井筒屋の小吟さん。都さん。富田屋のお二人様も、ようござんしたなア。

まさ 幸ひ座敷も明いてあり、

さは サア、お出てなさんせいなア。

はる そんなら、お二人さん、奥へ行て

小、都待ち合さうわいなア。

ト神樂になり、小吟に附いて皆々奥へ入る。向うより表具屋太郎兵衛、着附け、羽織、ぼつとせの心にて出て

太耶 かたぐの約束なれば、どうぞ間違はぬやうに逢ひたいものぢやが。

トいひく、本舞臺へ来る。下座より小兵衛、棒縛りになりて、ぶらりと出て、太郎兵衛に行きあたり

小兵 アイタ、何奴だく。

ト太郎兵衛、小兵衛を見て

太耶 ヤア。手前は坊主小兵衛ぢやないか。

小兵 こなさんは藪の下の表具屋、太郎兵衛殿。

太耶 小兵衛。其態で居るは、わりやまだ性根が、直らぬなく。

小兵 イヤサ、是にはちつと譯のある事でごんす。幸ひ馴染みがひに、此繩を解いて下んせ。

ト體を突き附ける。

太耶 おれが町内に居た、悪黨の汝なれど、見りや、どうやら不便な。ドレ、解いてやらう。

トいひく、兩手の繩を解いて、棒を離す。小兵衛、兩手を振りく

小兵 ア、嬉しや。これで、何盗まうとまぢや。

太耶 小兵衛。汝も心を入れ替へよ。元は藪の下で、相應に暮した者の悴でないか。小さい時から小盗みして、博奕を打ちならひ、段々募つて、追ひ出されたは幾たびか。後には町内の厄介ゆゑ、無理に坊主にして寺へやつたれど、そこでもこゝでも、盗みをして追ひ出され、其うちに親も死ねば、一家も無く、とうぐしまひには其さま。此上は粟田口か西の土手で、首斬らるゝがくわんにしく(?)悪心を改めて、親の菩提に小兵衛坊主、坊主小兵衛と歸り花を、コリヤ、咲かせ。

小兵 忝うござります。ほんに馴染みとて、表太様、誰が其やうにいうてくれませう。(ト目に唾附けて)此やうに涙がこぼれて有り難い。此上は、とんと心を入れ替へて、眞の坊主になりたけれど、好きな魚が食はれぬゆゑ、寧ろ剃りこぼつて野郎になつて、一奉公して稼ぐ心でござります。

太耶 そりやまだしもぢや。何奉公しても、格幅はよし、まつたうにすりや、人も置くてあらう。さうしてなりと、身をくろめたがよい。

小兵 アイく。そんならどうぞ、御無心ながら、錢を少し貸して下さりませ。

太耶 ちよつと逢うて、もういぢられる。コリヤ、爰に錢が二百ある。これを遺るほどに、月代剃つて湯へてもいつて、さつぱりとなれ。

ト錢二百文出してやる。小兵衛取つて

小兵 エ、有り難い。「二百の錢を取つて禮をなし、飛ぶが如く髪結ひ床へ失せにけり。」

ト源太節の身振りにて、髪結ひ床の暖簾の中へ飛んで入る。跡に太郎兵衛残り

太郎 ハテ、悪黨ながらも、他愛の無い奴ではある。

ト大拍子の神樂になり、向うより黒木屋彦三、袴、羽織、一本差しにて、發端の頭巾を着て、手代松兵衛を連れ、出て来て

彦三 松兵衛。御所から祇園までは、餘ッ程の道ぢやナ。

松兵 それにお前様は、わが家の門を除けて、二條通りをござつたゆゑ、猶廻りてござります。

彦三 さうかしらぬてや。(トいひ、木舞臺へ来て、太郎兵衛を見て)これは、表具屋の太郎兵衛殿。
(ト頭巾を取つて袂へ入れる。)

太郎 黒木屋の若旦那、あなたにお目にかゝらうと存じまして、最前から此處へ。

彦三 さうでござらう。ヤ、其床几へ。

太郎 左様なれば。

ト太郎兵衛、彦三、床几へ腰かける。松兵衛は蹲うて居て

松兵 若旦那がお前にお逢ひなされぬと、私が藪の下へ参るところでござります。

太郎 イヤ、堅い約束、減多に違へる表太ではござらぬてや。

彦三 時に、太郎兵衛殿。先きだつてお話し申した通り、親大隅お出入りの、梅園中將様のお姫様、鎌倉へ御婚禮、來月早々お興入れに、世にも稀なる御調度を、お吟味なされ、御家老桂左市様が、此彦三に仰せつけられしは、かの紫式部、石山に於て、源氏の巻を綴りし時、用ひられし硯、これを若菜の硯と名け、珍らしき重寶、此硯を其方が働きにて、求めくる、やうにとの仰せ。幸ひお前の處に先祖より傳はつて所持の由、承つて此間より掛合ひ、硯の形も御殿へ差上げ、御覽に入れしところ、相違なき趣きにて、早く求め、差上ぐるやうにとの仰せによつて、代金も三百兩と相極め、今日此所にて受取り渡し契約なれば、太郎兵衛殿、いよく御承知で、若菜の硯、御持参下されしかナ。

太郎 成程、仰せの通り、先祖より、故あつて所持致す若菜の硯なれど、據なきお頼みゆゑ、値段は三百兩に極め、賣り渡す應對に、洛中で人の知つた表具屋の太郎兵衛、何の異變がござりませう。すなはち、硯も、持参致しました。

ト國中より、服紗包みの箱を出し、開いて渡す。彦三とつくつと改め

彦三 成程、御所より御注文の通り、双鸞まうらんの模様並べて彫りし、この硯の式部形がた。石の古びも自然と瑠璃の如く、いかにも稀な、器物と見えませう。

大耶 イヤモ、似せても似せられぬ古物の硯こぶつ。いひさま、堂上方うだの御婚禮の棚飾りには、斯ういふ器うつはでなければかなひますまい。

ト此うち彦三、右の硯を取り收め

彦三 松兵衛。持参の手形を、太郎兵衛殿へ。

松兵 畏りました。(ト内懐より、首に懸けし革の證文袋を取り出し、袋とも)三百兩の振り手形、とつくりと改めて、受取らつしやります。

ト太郎兵衛に渡す。太郎兵衛取つて

大耶 振り手形なれば、念のため、ちよつと。(ト袋より手形を出して改める。此うち鬘結ひ床より小兵衛、月代剃つて、さるがち笠縁の頭になり、僧衣ころもを脱ぎ、着附けばかりにて出で、後に窺うて居る。)此須磨屋甚兵衛といふ兩替へは、たしか三條室町ではござりませぬか。

トいひく、右の手形を袋へ入れ、わが膝元に置く。小兵衛、鳥居に掛けてある座敷淨瑠璃の番附けをめぐり、革袋を取つて手形を出し、右の番附けを入れ替へ、元の所へ直し、手形を戴き、こなし合つて

鳥居の中へツイと入る。

松兵 左様でござります。表太様、お前をすぐに兩替屋へ、お供致しませうか。

大耶 イヤ、須磨屋甚兵衛はよく存じて居りますれば、これからすぐに寺町に用事もあれば、ちよつと寄つて、其上で室町へ参ります。

トいひく、革袋を首に懸け、懐中へ入れる。

松兵 そんなら、若旦那、私しはお先きへ。

彦三 オ、歸りがけに太郎兵衛を、寺町まで送つて、早う家うちへ行て、親父様おやさまに此様子を、とつくりと申せ。

松兵 ハイ。

大耶 左様なら、彦三様。

彦三 太郎兵衛殿、御苦勞。

大耶 おいとま申します。

ト唄になり、太郎兵衛、松兵衛を連れて向うへ入る。彦三跡にこなしあつて

彦三 まづ、此御川さへ方附けたりや、晩から此河原へ來うとま。時に、大切な硯を、御前へ持つて

行かすばなるまいが、次手にちよつと、小吟にも逢ひたし。どうしたものであらうぞ。

トこなしあるところへ、向うより宵毛、序幕の影、勘九郎を連れ立ち、出て来て

宥宅 これは彦三先生。いつの間に爰へ。

彦三 宥宅老か。ちと御用向きて。

勘九 御用向きとは、旦那、あまり眞面目過ぎます。

彦三 勘九郎。此間は逢はぬナ。時に、おりや御所へ上らねばならぬ。又近日々々。

ト硯を持って行かうとするを

宥宅 コレ、先生。そりやどうしたものぢや。

ト勘九郎も留めて

勘九 折角お目にか、つたに、すぐに歸るとは、あまり没義道。

宥宅 此二軒茶屋で、ちよびとは、ナア、勘九。

勘九 それ、藤屋は込んであれば、中村屋で、ツイちよつとお一つ。

彦三 イヤ、どうも今日はさうしてをられぬ。

宥宅 そこを是非とも。否ならこれを。(ト硯をひつたくる。)

彦三 ア、コレ。そりや大切な。

宥宅 これが欲しくば、中村屋へ。

彦三 ハテ、悪洒落せまい。其硯は。

勘九 人質とは、よい思ひ附き。

宥宅 進ぜうか。

彦三 ドレ。

宥宅 爰までござれ。

ト宥宅先きに、硯を見せて後退り、勘九郎、彦三を押しやる。これにつらされ、彦三、是非なく、三人揉み合ひ、鳥居の中へ入る。始終大拍子にて、引違へに小吟走り出て

小吟 今、藤屋の女子衆に聞いたら、たしかに彦三さんが見えたやら、どこへござんしたか知らぬ。

トうろ／＼そこらを探れるところへ、向うより千鳥濱右衛門、着附け、羽織、大小、頭に好みの侍ひにて、出て来て

彦右 こりや忝い。小吟 さては身共を尋ねて居たか

ト直ぐに抱くを、小吟振り退け

小吟 誰ぢやと思へば、エ、濱さん。尋ねるお方は見えす、あた好かん。おいて下さんせいなア。
濱右 おいてくれとは、どうぢやぞいやい。此間其方をちよつと見染めた此千鳥濱右衛門。甚だ執心。
それゆゑ、富田が許にて今日も身共が揚げて此祇園へ、明後日は鞍馬、又明後日は伏見の稻荷。
コリヤ、いくらいうても盡さぬ。それよりちよつと爰で。

ト又抱くを

小吟 エ、否ぢやわいなア。離して下さんせ。見とむないわいなア。

ト逃げ廻るを、濱右衛門追ひ廻し、いやらしう抱く。此うち髪結ひ床より松の尾新兵衛、上張り、元結
ひの津かけ、頭に鬘棒を差し、髪結ひの形にて出て、小吟を引き分け、濱右衛門を取つて投げる。

濱右 アイタ、、、。(ト悔り)。

小吟 思ひがけない。もうし、お前は。

新兵 此床の髪結ひ、松の尾新兵衛といふ者。

小吟 エ、そんなら半兵衛殿の内儀の、おrikさんとやらの

新兵 サア。何ぞ由縁が無くば、滅多に爰へ出やせぬわいの。

ト此うち濱右衛門、腰を抱へて立上り、新兵衛を見て

濱右 ウヌ。憎い奴め。案内も無く侍ひを、今の如く取つて投げるとは。

新兵 益體もない。何のお侍ひ様を私しが。

濱右 成程。然らば身共が手に。ハテ、痛い投げやうをしたなア。

小吟 申し、新兵衛様、私が身の上、知つて居やしやんすからは、定めて彼のお方の事も。

新兵 サア、お前のい印しは承知々々。

濱右 コリヤ、町人。今小吟がいふ事を、承知とは。

新兵 ハテ、お前はお客、あの子は女郎。それを承知といふことサ。

濱右 イヤサ、承知ではない、不承知だ。なんぼでも身が心に、従はぬゆゑ。

新兵 ハテ、そりやお前がわるいから。

濱右 わるいとは、何が。

新兵 男が。

濱右 ヤ。
新兵 まづ、第一色が黒うて、顔の道具は揃はず、西内なれば、人が上手といふ出目で、眉毛は短く、
頭やら額やら知れぬ、小うつたうしい月代。どこに一つ取り得の無い殿御振り。それで小吟さん

が靡かぬは、尤もかい。

濱右 そこをどうぞ靡くやうに、此顔の造り直しが、出来ようかな。

新兵 それを直すがおれの商賣。御覽の通り髪結ひなれば、其うつたうしい額を、コレ此毛抜きて、(ト毛抜きを出して)これて額の角を立て、立派な男にしてやりませう。

濱右 忝い。御苦勞ながら、サ、早く、早く。

小吟 もうし、新兵衛さん、必ずともに。

新兵 サアノ、よい。黙つてござれ、此奴を斯うするも。(ト濱右衛門を酷く引寄せ)かのお方の事を。

小吟 エ、。

濱右 何とした。

新兵 ハテ、黙つて居よう。

ト毛抜きにて、ピリ／＼と毛を抜く。

濱右 アイタ、、、、。コレ、色男にならうと思へば、術ないものぢや。これも何ゆゑ、小吟殿ゆゑと思へば、堪へずばなるまい。

ト泣き／＼いふ。小吟もこなしあつて

小吟 新兵衛さん、そんなら彦三さんも、見えたかえ。

新兵 サ、たしかに最前床の内に見て居たが、さうであらう。

濱右 ヤア、何ぢや／＼。

ト立たうとするを、新兵衛引き附け

新兵 ハテ、じつとしてござりませ。

小吟 どこに居やんす、どうぞ知らせて下さんせいなア。

新兵 此毛、ざい六が知ると、邪魔になる。コレ、耳持つて来た。

小吟 アイ／＼。(ト側へ寄る。新兵衛、濱右衛門が頭を押へ、小吟に囁く)そんなら、アノ、中村屋に。

新兵 コレ。……ちやつと。(ト顔にてする。)

小吟 忝うござんす。

ト小吟喜び、鳥居の内へ走り入る。濱右衛門おごつくを、新兵衛アイ／＼と角を抜く。

濱右 アイタ、、、、。もう堪へられぬ／＼。

新兵 ハテ、もちつとぢや。(ト紙にてグツと拭き)それもう仕舞ひぢや。鏡で見たがよい。

ト突き放す。濱右衛門唐犬額におかしく角を抜き上げた顔にて、額を撫で、見て

濱右 ア、嬉しや。助かつた。……痛めし代りに、さぞ色男になつたであらう。
新兵 なつたく。業平まがひの色男。

濱右 二條の妃の、コレ、小吟。(トそこらを探れ廻り) ヤア。小吟はどこへ行た。

新兵 たしか清水の方へ。

濱右 南無三。あいつをやつては。

ト鳥居の内へ追ッかけ入る。

新兵 あ、いふ呆痴者が、大小差すもをかしい。ハ、ハ、ハ、ハ。

ト笑ふ。てんつーになり、向うより新兵衛女房おせん、やつし、前垂れ、世話女房の拵へにて、辨當を
提げ、出て来て

せん こちの人、爰に居やしやんすかいなア。

新兵 オ、女房ども、辨當か。

せん アイ、遅うなつた。堪忍して下さい。ほんに、北野のおりくさんの方から、わざく人^{はう}が来た
わいなア。

新兵 妹の方から人が来たは、此間^{このまは}いうた、小吟殿の事であらう。

せん サア、其小吟様はお前の妹婿、黒木屋の半兵衛様のお主筋、それでどうぞ身請けの事を。

新兵 おれも妹の頼み。其事が心にかゝつてある。今も今とて小吟殿が……イヤ、くはしい事は、お
せん、見世へ行って話さう。

せん ほんに、お飯もあげうし、何かの相談を、こちの人。

新兵 おせん、おぢや。

せん アイ。

ト唄になり、新兵衛、おせんを連れ、床の内へ入る。鳥居の内より小吟、彦三が胸ぐらをとつて

小吟 サア、ござんせ。ト無理に連れて来て。お前にいはねばならぬ事がござんすわいなア。

彦三 何を。(ト振り離す。これより三味線入り神樂になる。彦三酒に酔うたるこなしにて) 慮外者めが。女子だ
てらに男の胸ぐら取つて、な、何とする。(トひよろこ、こなし。)

小吟 それ見やしやんせ。酒をあがると、常のお心とは引きかへて、何事もかまはず、夢中になつて。

彦三 夢中も凄じいわい。何の、酒の一升や二升たべたというて、本性を違へる彦三ではござなく候。

小吟 そんならお前は

彦三 本性のわけが聞きたいか。いうて聞かさうか。

小吟 アイ、聞きたうござんすわいなア。

彦三 聞きたくばいうて聞かさう。コリヤ、千鳥とやらいふ侍ひ客に、馴染みが出来て、此頃は揚げ詰めとやら、晝夜のおしげり、さぞ面白からうな。

小吟 何の面白い事。わたしや悲しうござんすわいなア。いつぞや居續けの時、歸らしやんしたま、やうく今日逢うても、案じて居る私には顔も見せず、中村屋で、宥宅や勘九郎が勤めて、ソレ其やうに酔うてござんすは、お前は面白うござんせう。わたしや明け暮れ、お前の事を案じて、遣る瀬はござんせぬわいなア。(ト泣く)

彦三 こりや泣くか。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。面白い。女郎の泣くは大名の鶯、千兩道具、其涙を侍ひに、泣いて見せたら喜ぶであらうが、此彦三はをかしい。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。イヤ、どうもつまらぬワ。ねむたうなつた。(トあたりを見て、こなしあつて)幸ひの髪結ひ床、こりや畜生か。(ト小吟が手を取つて)もう堪忍してやる。うせをれやい。

小吟 どこへ行くのぢやえ。

彦三 サア、富田屋までは餘ッ程遠し、二軒茶屋は入込み。幸ひ向うの暖簾の内へ。

小吟 めつさうな。向うは髪結ひ床。

彦三 其髪結ひ床も床、寝るところも床。ハテ、どこへ行ても一寝入りせねばこたへられぬ。ア、酔うた酔うた。

ト小吟が手を曳き、こけやうとする。

小吟 ア、もうし、危ないわいなア。

彦三 ドツコイ。……井戸端の櫻あぶなし酒の酔ひ。こりや江戸の女子の被句。これは又、京の女郎のほんまの心底。さらば聞かうか。

ト唄になり、小吟を連れて彦三、千鳥足にて床の内へ入る。此前より濱右衛門出かけ見て居て、此時濱右 あの、今の舌たるさ。さては小吟が深いひ交して居る彦三といふは彼奴。身共と違うて、ハテ、よい男ぢや。

トぐんなりとなると、ころへ、下座より小兵衛、勘九郎が着附けを着て出て

小兵 コレサ、濱右衛門様、爰に居さつしやりましたか。一遍尋ねてをりました。

濱右 其方や坊主小兵衛。見れば、大分立派な形になつたが、そりやどういふ事。

小兵 サア、何ぞよい仕事であらうと思つて、今中村屋の内をうそく窺うたら、奥座敷に脱ぎ捨て、あつたは此着物。ちよいと引ッかけて来たが、何とよく似合ふてござりませうが。これからは此

形て室町の兩替屋へ仕掛けて、大金を引ツかけるのぢや。

濱右 ムウ。室町の兩替屋へ行て、大金を引ツかけるとは。

小兵 其玉をお前にも、戴かしませうか。(ト懐中より最前摺り替へた手形を出し、ちよつと小口を開き見せ) コレ。金子三百兩也。此手形を以て屹度相渡可申候。これさへ持つて行けば、何時でも寶町の兩替屋で、三百兩になつて來るのぢや。(トいひ、疊んで懐中へ入れる)。

濱右 ハテ、妙な物を持つて居るな。

小兵 これも小さい時から仕込んだ藝のお庇。お前もいつそおれが弟子になつたがよい。

濱右 どうて名を替へたれば、其方が世話であらう。時に、小兵衛。其方が以前國表の寺にをつた時から、悪黨者のえ身共も懇意に致したれど、それより中絶。不思議に此處で出會うて、先き程とくと頼み置いたる事、承知か。

小兵 そりや小吟とやら、彦三とやらが仲を、裂く事ぢやござりませぬか。

濱右 いかにも。其二人は、コリヤ。(ト囁く)。

小兵 ムウ。そんなら、あの髪結ひ床に。

濱右 これへ引き出して。

小兵 お前の存分に。(ト髪結ひ床へ駆込み) サア、二人とも、うせやアがれ。

トばたくにて、新兵衛、おせん的首筋を引摺り出る。

新兵 こりや思ひがけない、何するのぢや。

せん 何科あつて手籠めにさしやんす。

ト振切るな

小兵 吐すな、賣女め。何科とは不義の科。あの濱右衛門様の揚げ詰めの女郎を、ちよろまかして忍び合ふは、間男同然、遁れはあるまい。コリヤ、彦三め。

新兵 何と。

濱右 憎い此小吟め。よくも身共を。(トおせんを捕へ、顔を見て) ヤア、こりや違つた。

せん ナニ、違つたえ。

濱右 イヤサ、それは。

ト新兵衛を見て、「これも違つた」と恟りする。

小兵 イ、ヤ違はぬ。此坊主が、イヤ、還俗した男がいひ出す事、滅多に違つてたまるものか。

新兵 汝は最前月代刺つてやつた、乞食坊主め。

小兵 ほんに、わりや髪結ひぢやナ。

トおせん、こなしあつて

せん もうし、こちの人、思ひ廻せば此場の仕儀、どうもわたしや濟まぬわいなア。

新兵 成程。男のある女房を、不義者といはれ、引き出されてはおれも濟まぬ。

せん それぢやによつて、(ト小兵衛と濱右衛門の眞中へ行つて) もうし、お侍様、小兵衛さんとやら、わたしや不義した覚えはござんせぬぞえ。

小兵 そりや、今の間違ひで、小吟と思つたゆゑ。

せん サア、思はれても、思はれいても、不義の悪名、雪いで下さんせ。

小兵 ヤ。

新兵 現在の女房、男の側で不義間男といふには、何ぞおせんが身に暗い事があつてあらう。それを糺さにや料簡せぬ。殊に、髪結ひ床は、此新兵衛が稼業場。何て踏ん込んだ。

小兵 サア、それも今の間違ひから。

せん 間違ひとばかりでは濟まぬわいなア。不義と名が立ちや、私は夫新兵衛殿に、ナ、去られるでござんせう。其潔白に、お前方お二人を、代官所へ連れて行て、間違ひといふ不義の明りを、立て

てもらはにやなりませぬわいなア。

小兵 めつさうな。代官所へ行て堪るものか。

濱右 さうぢや。高が斯ういふ事を代官所沙汰にしては、身共が身の上にならうも知れぬ。

新兵 そんなら、扱はつしやりませ。

小濱 扱へとは。

新兵 ハテ、おれが女房に悪名附け、不義者とあれば新兵衛は男、此儘では料簡せぬ。そこを、相手になつたり、仲人になつたり、挨拶するのぢや。

小兵 こりやおれに上越すいたぶりぢや。

せん いたぶりとやらいはれては、猶の事。

新兵 女房ども。こりや代官所の方が近道。

濱右 小兵衛。こりやマアどうせうぞ。

小兵 エ、お前も侍ひのやうにも無い。押しの利かぬ。つい二朱か一分出して、幕を切つてしまはつしやりませ。

新兵 イヤ、二朱や一分では幕は切れまい。ナア、女房ども。

せん マア。こちらの手付けは少なうても、大方五十兩。

濱右 ヤア、アノ、五十兩。(ト恟りする)。

せん 五十兩出す事が否なら、代官所へ。

濱右 いつそ其方が廉うあがる。身共は出る氣ぢや。小兵衛、手前は。

小兵 めつさうな。おりや代官所どころか、山支配へも出られぬ。

濱右 ぢやというて、五十兩。(トちよつと思案して) さうぢや、小兵衛。今見せた其方が持つて居る振り

手形を、身共に貸しやれ。

小兵 エ、。(ト恟とする)。

濱右 ハテ、其方が持つて居る三百兩の振り手形は、たしかに元手無しの只取り、イヤサ、たとへ實の

手形でも大事ない。ハテ、五十兩の抵當に三百の手形で、ナ、マア、此場を、埒明けるのサ。

小兵 情けない。子供に物は聞かされぬ。おりやそんな物持つて居る覚えは無いぞ。知らぬぞ。

濱右 イヤ、知らぬとはいはさぬ。先き程室町の兩替屋へ、取りに行くというたではないか。

小兵 サア、それでも。……エ、けちな。斯ういふ處に居ようより

ト行かうとするを、新兵衛引廻し、留めて

新兵 待て、小兵衛とやら。女房を不義というた懸り合ひ。減多に此場を動かす事はならぬぞ。

小兵 其目當は濱右衛門殿、おりや頼まれたゆゑ、かまひは無い。

せん かまひが無ければ、お前が持つて居やんす振り手形とやらを、爰へ出して行かしやんせ。

小兵 イ、ヤ、そんな物を持つては居ぬ。

濱右 現に最前、身共が見届けて置いた。是非どうぞ貸してくれい。

小兵 エ、知らぬ。

新兵 知らねば、女房、

せん 代官所か。

濱右 貸してくれるか。

小兵 サア、それは。

四人 サア、く、く、

小兵 こりや又ひよんな事に懸り合はしたなア。

ト頭を押へる。向うバタ／＼にて、太郎兵衛、大息ついて走り出て

太郎 サア／＼、大事ぢや／＼。彦三殿は何處に居る。黒木屋の彦三殿。彦三殿、々々々。

ト狼狽へて、あちこち駆け廻る。おせん、よろしく留めて

せん コレ、もうし、黒木屋の彦三様は、私わたしがゆかり。お前いかう取りのぼせてござるが、何の用でござんすえ。

太郎 何の用か。おれが大切な若菜の硯を、三百兩に賣つて、代金は振り手形、室町の兩替屋、須磨屋甚兵衛へ持つて行て、受取らうと出したところが、コレ、此やうな座敷淨瑠璃の書附けぢやわいの。それぢやによつて、彦三殿、々々々。

ト狼狽て、立上がるを、新兵衛も留めて

新兵 コレ、お前、彦三様から振り手形を受取る時に、よもや改めずに受取りはさつしやるまいがの。

太郎 サア、最前改めた時は、須磨屋甚兵衛が手形。持つて行たれば、コレ、此淨瑠璃の書附け。

ト新兵衛、おせん顔見合せ、思ひ入れあつて

せん こちらの入。

新兵 女房ども。

せ新 これて大方。

ト小兵衛を見る。小兵衛最前よりいろ／＼こなしある。濱右衛門も心付き

濱右 ヤア。そんなら小兵衛が

小兵 コレ。

ト濱右衛門が胸ぐらを取つて、下に置く。

せん こちらの入。どう廻つても彦三様のお爲、もう此上は、

新兵 振り手形は此奴が。

ト小兵衛が懐ろへ手を突込み、手形を引出す。それをと立廻りにて、奪ひ合ふ。おせん中なかよりちやつと手形を取つて

せん 實まことの手形か。ソレ、見やしやんせ。

ト太郎兵衛へ渡す。太郎兵衛見て

太郎 成程、これに違ひはござらぬ。さては、あの、小兵衛めが

新兵 摺り替へたのに違ひはない。

小兵 もう此上は。

濱右 汝おんが肩持つて

ト抜いて切りかける。新兵衛立廻り、小兵衛逃げようとするを、おせんと立廻り、太郎兵衛も手傳ひ、

皆々ふろしくあつて、ト新兵衛刀を引ッたくり、兩人をさんぐに背打ちにして

新兵 身動きひろぐと、打ち殺すぞ。

せん 首尾よう手形が元へ戻れば、若旦那のお名も出す、

太郎 いかいお世話でござりました。

新兵 コレ、禮には及ばぬ。手形を持つて、ちやつと兩替屋へ。

太郎 忝うござります。さやうなれば、又室町へ、テモ、あつたら臆を潰した事ぢや。

トいひく向うへ走り入る。

せん こちの人。此二人はえ。

新兵 手形を取返した上は、助けてこます。

ト二人を引起し、酷く突き離す。小兵衛、濱右衛門こなしあつて

小兵 ア、今日はいかなる悪日ぞ。折角骨を折つて、盗んでは取返され、一度ならず二度まで。

濱右 それが譬への通り、

小兵 人垢身につかずぢやなア。

ト唄になり、小兵衛、濱右衛門を連れ、鳥居の中へコソ／＼と逃げて入る。跡におせん、新兵衛残り、

こなしあつて

せん こちの人。お前と相談して、小吟様の身請けの金、拵へようと思ひの外、

新兵 矢ッ張り彦三殿のお爲なれば、身請けの金は、又思案があらう。

せん そんなら、一しよに、もう家へ歸らうかいなア。

新兵 いかさま、もう日も暮れ方。早う家へ行んで、こちの相談。

せん 併しあのお二人様が。(ト床を教へる)。

新兵 ハテ、酔うて寝てござる彦三様。おりや出直して店を方附けに来るまでに、丁度酔ひも醒めるて

あらう。サア、女房ども、おぢや。

ト唄になり、おせん、新兵衛しか／＼あつて、向うへ入る。鳥居の内よりお春、みやこ、お藤に、徳兵

衛、伊吉も一しよに出て来て

みや 小吟さんはもう先きへ歸らしやんしたかいなア。

ふじ 藤屋にも中村屋にも居やしやんせぬによつて、大方歸らしやんしたであらうわいなア。

ト床の中より小吟出る。

小吟 新兵衛さんく。おせんさんも、何處へ行かしやんしたぞいなア。

皆々 ヤア、思ひがけない、小吟さんは
伊吉 何處からぢや。

小吟 これは皆さん。もう歸るのかえ。

ふじ 小吟さん。お前を尋ねて居ましたわいなア。

皆々 サア、一しよに。

小吟 イエノ、わたしや、ちよつと爰に。

徳兵 ハテ、もう日が暮れる。

みや 連れ立つて歸らうわいなア。

小吟 それでも、アノ。

ト床の内へこなしあるを

皆々 サア、マア、ござんせいなア。

ト眼になり、無理に小吟を連れて皆々向うに入る。ト合ひ方、時の鐘になり 鳥居の内より、宥宅、勘

九郎、紺着板を着て、供の形になり、小さな薬箱を持ち、出て来て

勘九 宥宅様、何と私が形をちよつと見て下さりませ。正眞の折助と見えませうがナ。

宥宅 コリヤ、大きな聲せまい。……時に、もう彼奴は出て来さうなものぢやが。

勘九 もう日暮れ前。道を迷へはせぬかや。

一宅 イヤノ、かたノ議定して置いた。マア爰で、ちつと待合はして見ようか。

勘九 それがようござりませう。

ト此せりふのうち、宮神樂になり、向うより筒井の手代金六、着附け、羽織にて、忙がしきうに出て来て、すぐに木舞臺へ来る。宥宅、金六を見て

宥宅 これはノ、筒井のお手代金六殿。丁度よい處てお目にかゝりました。

金六 宥宅老。私も最前から、参らうと存じましたが、いろノの事で大きに遅うなりました。まづ、

何は差置き、先日お頼み申した、彼のお薬の儀、定めて今日御持参でござらうナ。

宥宅 其儀お頼みゆる、承知ではござれど、其節も申した通りに、お約束の

金六 二十兩は、コレ。(ト懐ろより金を出して見せ)此通りに持参致した。

宥宅 イヤモウ、それさへ出来れば、薬は何時でも、調合致して進ませませう。

金六 さやうなれば、どうぞ。

宥宅 只今これにて。(ト床几の上に上り、仔細らしう)三助。其薬箱をこれへ。

勘九 ハイ。

ト藥箱を宥宅の前へ持つて居つて直し置き、グツと下の方へ下り、下に居る。金六も床几に腰かけて見て居る。宥宅風呂敷を解き、藥紙を置き、匙を出し

宥宅 只今調合致す。此藥方は此宥宅が家の秘傳、只一服で受合ひます。それもこなたの事のえ、二服合せて進ませませう。

金六 それは有り難うござります。

宥宅 コレ、此藥種などが、餘人の知らぬ、世にも稀なる高い藥種でござるて。

金六 ヘイ。そりや何といふものでござります。

宥宅 これが、かの、無可有と申し、唐から來るもの。蜀山に居るところの、毒鳥の肝ぢやて。

金六 ハ、ア、無可有。ハテむづかしい名ぢやな。

宥宅 これに紫霜石、斑猫を加味致すぢや。(ト宥宅いろく藥を合せ、二包みにして、こなしあつて藥箱をしまひ) サアお望みの毒藥。(ト金六に渡す)。

金六 こりや忝うござりますが、宥宅様、これを服ませれば立ちどころに死ぬとあれども、ほんの口受合ひ。私もしつかりとした事を見ねば、大枚二十兩といふ金子を。

宥宅 成程、御尤も。すなはち只今此處にて、毒味さして見せまう。

金六 すりや毒味を。……そりや誰に。

宥宅 あれ。

ト勘九郎を顔にて教へる。

金六 ムウ。尤も。

トこなしある。此うち始終合ひ方。宥宅茶碗へ水を汲んで來て、右の藥を入れ、搥立て、前に置き

宥宅 三助。これへ參れ。

勘九 ハイ。(トザつと來て) 何の御用でござります。

宥宅 コリヤ。其藥を服め。

勘九 エ、。(ト大きに悔り)。

宥宅 ヤイく。主の己がいひつけ。なぜ服まぬ。

勘九 めつさうな。あの毒をば。

宥宅 喰はねば、コリヤ。

ト脇差をスラリと抜いて突き附ける。勘九郎逃げようとするを、金六引廻し、向うへ廻つて留める。宥

宅、金六、勘九郎を真中に挟み

宥宅 否でも應でも服まさにやおかぬ。

勘九 エ、こりや情けない。どうぞ御料簡なされて。

宥宅 こま言いはずと、早く喰へ。

勘九 こりやモウ。

ト逃げようとする。金六立塞がつて勘九郎を宥宅が方へ突きやる。宥宅、勘九郎を捕へ、兩人して口を割り、右の一藥を無理に服まして突き離す。勘九郎毒が廻つた心にて、さまざま苦しみ、血を吐いて、
ハツタリ倒れる。金六悔り、思ひ入れ。

宥宅 なんと、金六。手前が秘傳の毒藥。立ちどころに利き目は此通り。

金六 イヤモウ。これを見て、とんと疑ひが晴れました。(ト懐中より金を出して) サア、約束の二十兩。

ト渡す。宥宅受取り

宥宅 こりや忝い。人の見ぬ間に

金六 シテ、此死骸は。

宥宅 最早暮れあひ。ひそかに己が方附けておく。

金六 そんなら、お先きへ。

宥宅 早うござれ。

金六 何でもこれであの息子め。(ト藥を戴き) さうぢや。

ト合ひ方になり、向うへ入る。宥宅花道の角へ行て、金六があとをつくりと見送り、是にて勘九郎が死骸に知らず。起き上り

勘九 宥宅様。

宥宅 勘九郎。首尾よう行た。(ト金を分けて) ソリヤ、約束の十兩。

勘九 こりや忝い。

宥宅 流石は幫間。血を吐いて死んだ今の仕打ちは、とんと本まのやうにあつた。

勘九 サア、あんな役は、他人のしたのを見て居るゆゑ、滅多にさゝぬが、なんぼいひ合せたとはいひながら、嘘にも毒と聞いては、どうも氣味がわるかつた。

宥宅 イヤ、滅多に命に氣遣ひのある藥ではない。併し事によつたら藥が廻ると、狂人にならうも知れぬ。

勘九 エ、めつさうな。狂人になつて堪るものか。途方もない物を服ましたぞや。

宥宅 ハテ、狂人になつても一時が半時。僅かな間ぢや。薬が下腑へ納まると、其通りの本性になるのぢや。

勘九 さういふ事なればよいが、時に、最前中村屋で、彦三を勤めて、無理に酒に酔はしておいて宥宅 此方へ捲き揚げておいた、大金になる、コレ、此若菜の硯。

ト硯を出して見せる。此うち彦三、酔ひ醒めたるこなしにて、髪結ひ床より出て、之を聞いて悔りする。勘九 何もかも、手つがひよう行て
兩人 うまい〜。

ト喜ぶうち、彦三はツカ〜と出て

彦三 大切な硯。滅多には渡さぬ。

ト引ツたくるを

宥宅 ヤア、彦三。

勘九 其硯を。

ト取りにかゝる。三人立廻りよろしくあつて、ト宥宅又硯を引ツたくり、向うへ一散に走つて入る。

彦三「それは」と行くを、勘九郎支へてかゝるを、彦三又立廻りにて、勘九郎を突きこかし、彦三も向う

へ走り入る。勘九郎起き上り

勘九 何でも金になる、あの硯を。

ト尻引ツからげ行かうとする。此前より小兵衛後へ出て、窺うて居て、此時つか〜と出て勘九郎を引廻し

小兵 コリヤ、待て。汝よりおれが先きへ行くワ。

勘九 何を、汝が。(ト小兵衛を突廻し、形を見て) ヤア〜、合點のゆかぬ。そりやたしかに己の着物ぢやが、中村屋へ脱いて置いたが、さては汝が盗んだナ。

小兵 見あひ次第、何によらず、してやるのが己が商賣ぢやわい。

勘九 さう吐しやア汝は泥棒。(トかゝるを立廻つて、小兵衛、勘九郎の腕を捻ぢあげる)。アイタ、ヤ。こりやどうする〜。

小兵 まだ汝が金を持つてうしやアがる。それも此方へ。(ト懐ろの金を奪つて) もう用は無いつ。

ト取つて投げ、行かうとする。勘九郎又、むく〜と起き上り、これより狂人のこなしにて、小兵衛に取リつき

勘九 コレ、男。おれを振り捨て、こなたはどこへ。さては丹波の篠山、太鼓の連れは邪魔になる。ど

うよくな。泥棒か。盗人か。ハ、ハ、ハ、ハ。こりや面白い。

ト小兵衛を捕へ、いろく狂ふ。小兵衛もこなしあつて

小兵衛 さては此奴狂人になりをつたナ。エ、面倒な。退きをらう。

ト引き退けるを

勘九 何ぢや。狂人ぢや。狂人とはほうさい坊。これに懲りよ、道齋坊。

小兵衛 エ、邪魔な。(ト立廻りあつて、引揚げ、茶屋の店へ取つて投げ込む。障子蹴破り、勘九郎見事に中返り。

小兵衛 こなしあつて)さらば硯を、せしめて来うか。

ト思ひ入れにて、向うへ入る。チヨン／＼にて、返し

造り物、後ろ遣見に、四條石垣の茶屋の體にて、懸け行燈、これに燻らず火を點し、舞臺は河原の體、

よき處に蒲鉾の乞食小屋。すべて四條河原の模様にて、踊り三味線にて道具とまる。

ト向うより宥宅、彦三、硯を引合ひながら出て、花道にて

彦三 コレ、宥宅、此硯は彦三がお出入りの、梅園家より仰せつけられたゆゑ、方々と詮議して、やうやう今日買ひ求めた、大切な一品。それを其方に奪られては、御所への言ひ譯、親仁様の手前も

濟まぬ。どうぞ、返してたもく。

宥宅 否ぢや。おれも金になる物ゆゑ、最前中村屋へ太鼓を持つて、ぶぶ六醉はして、奪つた此硯。奪られたは汝が呆痴。これをうまく返さうか。馬鹿な事を。

彦三 そりやどうしたものぢや、宥宅。これまで其方の用、無心、一々に聞き届け、茶屋附合ひの義理づくも、皆此彦三がしておいた。恩を見せたおれが、難儀になるをかまはず、硯を横取りすると、は、泥棒同前。

宥宅 オ、泥棒ぢや。これがおれは地金。今まで人柄作つて居たも、斯ういふ事をしよう爲だわやい。

ト酷く振離し、かまはずに本舞臺へ来る。彦三しどろに本舞臺へ来て、宥宅に取付き

彦三 イヤ／＼、硯を返さぬうちには、なんぼうでも、やらぬ。

宥宅 やらぬといつても、引ッ奪つたらおれが物。それを今更どう返されう。こゝ、離せ。

彦三 イ、ヤ、たとへ死んでも、硯を取返さなや、滅多には、離さぬ。

宥宅 テモ、執念な奴てはある。幸ひの闇の夜。死にたか寧そ。

ト脇差したスラリと抜く。彦三ちやつと身をかはして

彦三 そんなら宥宅、此彦三を。

宥宅 オ、人知れず殺して、此硯を金にするワ。

彦三 エ、汝はナア。

ト思ひ入れ。宥宅脇差しを振廻し

宥宅 ソリヤ〜。ちやつと逃げぬか。逃げねば汝を。

ト切つてゐる。彦三摺抜け、立廻りにて、手にあたる「塵芥捨つべからず」の立て札を取つて、これにて兩人、闇の模様をタテになり、下座にて、櫻づくし山姥の鳴り物入りの唄になり、兩人タテのうち、宥宅が脇差しを叩き落す。宥宅は立て札、彦三は脇差しと入り違ひ、矢張りタテのうち、蒲鉾小屋より小兵衛、頬むりにて、出刃庖丁を持ち、窺ひ出て、よきところにて、宥宅を出刃にて突く。宥宅は彦三が斬つたと思ひ

宥宅 ヤア、彦三。わりや、切つたなく。

トよろめきかゝる。彦三もハツとこなし。小兵衛又切り附ける。此タテのうち、彦三、さまよひの思ひ入れにて、顛倒す心にて、方々を見廻しながら、袂を探り、頭巾を尋ねる。小兵衛探り寄つて、宥宅を挟む。宥宅立ち身にて苦しんで居る。彦三やう〜頭巾を取出し、着ようとして着られぬこなしにて、それなりに取落す。此うち宥宅息絶え、パツマリこけると、彦三も悔り、ホイと下に居る。忍び三重になり、彦三足の立たぬこなし。此うち小兵衛、死骸に探り寄つて、硯を取出し、此方へ来る。彦三もわざりながら、死骸の方へ探り寄る。小兵衛はさし足にて花道へ行つて、硯を戴き、思ひ入あつて、向うへツイと入る。此うち始終忍び三重。彦三死骸の側へ行つて、這ひ寄り、懐ろをいろ〜と探して

彦三 ヤア〜。こりや大切な硯が。

トはつと思ひ入れあつて、しもしや〜といふ心にて、舞臺中を探り見るうち、向うより灯影見ゆるゆゑ、立ちあがるところへ、向うより手代久三に提灯を持たせ、三重の母お高、婆にて、杖を突き、出て来る。彦三これにて顔を隠し、花道にて携れちがひ、お高は本舞臺、彦三はこなしあつて、ツイと向うへ走り入る。お高は彦三が落したる頭巾を拾ひ、透し見る。久三は提灯の火にて、宥宅の死骸を見つけ

久三 ヤア、こりや人が。

トお高、提灯を叩き落し

たか エ、何をしをるやら。

ト思ひ入れよろしく、

幕

二幕目 隣り同士の場

登場人物

黒木屋彦三、黒木屋大隅、黒木屋番頭、半兵衛、黒木屋手代、惣八、筒井重三郎。

筒井の手代、金六。仕事師、長兵衛。牛飼ひ、五郎吉。筒井の母お高。彦三女房、お路。桂佐市。手代、松兵衛。

造り物、上の方高塀、下の方黒の板塀、兩方高さ五尺ほど。此内に隣り同士の家根の棟ばかりを繪にて

見せ、上の方に鬼瓦の棟瓦、下の方に丸に大の字の棟瓦向ひ合ひ、見合ひにて居る。真中は庇合ひにて、梅の木の間を見せ、此道具好みあつて、右の鬼瓦に風のもつれかゝりあるを、立花屋米藏、丁稚岩松、風の糸巻きを持つて、これを取らうと下より焦つて居る。通り神樂、てんつくにて幕明く。

岩松 エ、いま〜しい。折角揚つた風が筒井の家根へ、引ツか、つた〜。(ト米藏が糸を引くを制して。待て〜。さう引いては糸が切れる。アレ〜、鬼瓦へ引つか、つてあるわい。

米藏 コリヤ、待て〜。おれが筒井の男を頼んで来て、取つてもらふ筈ぢやわい。

岩松 早う取つてくれ、ばよいになア。

米藏 あの鬼瓦は怪體な鬼瓦ぢやな。

ト此うち通り神樂にて、下座より仕出し○△×出て来て

○ アレ〜、見さつしやれ。噂の鬼瓦に風が引つか、つてあるわいの。

△ さてはあの鬼瓦が、此間から噂のある、噂の黒木屋の息子が煩うて、囃言いふ鬼瓦てござるか。

× サア、それで黒木屋の方から、だん〜と頼んでも、あの瓦を取つてやらぬとの事。

岩松 コリヤ、米よ。何ぼうでも風を取つてくれぬぞよ。

米藏 ハテ、頼んでおいたによつて、取つてくれるわやい。

○ ほんに、奇妙な鬼瓦ぢや。黒木屋の方を睨め付けて居るわい。

ト此うち塀の内より、筒井の手代久三出て、上の方の家根へ這ひ上る。

岩松 ソリヤ、風を取つて、くれるワ〜。

久三 コリヤ〜。其やうに糸を引くな。今取つてやる。大事の鬼瓦が落るわい。

○ アレ、大事の鬼瓦ぢやといの。

△ 何ぞいはれのある事であらうわいの。

× ハテ、變つた鬼瓦ぢやなナ。

ト矢張りてんつくにて、仕出し三人向うへ入る。

二人 サア、どうぢや〜。

久三 忙しい奴等ぢや。釘へ糸がもつれ込んである。コリヤ、減多に引くなく〜。(トいひながら糸を取り、ソリヤ、ほつてやるぞ。(ト風を抛る。)

岩松 よう取つてくれたなア。

米藏 これから河原へ行て揚げう。

岩松 合點ぢや。よい〜。

ト扇を持って、兩人踊りながら向うへ入る。久三家根よりおりかゝり
久三 ハテ、此鬼瓦て氣を揉まし居るわい。

ト引込む。チヨン／＼にて、返し

右の家根を引き上げる。前の扉を引いて取る。後ろ二重舞臺。見附け戸棚。下手納戸口、上の方面の障子。橋が、り黒の板扉、見越しの松。これは隣りの庭にて、此前いつもの處に門口。上の高欄、下は小家根の切り獲。鬼の棟瓦見えるやうに懸け、懸け板に仕掛けあつて、此前に、筒井屋の場と書きつけあり、すべて吳服屋の模様。奥の間にて、劍術試合ひの太刀音、懸け聲。白癡子にて道具とまる。ト右二重舞臺に金六、帳箱に向ひ、帳を附けて居る。手代七助は算盤を置いて居る。

七助 コレ、金六殿。どうしたものが、此勘定は、一向合ひませぬぞや。

金六 合はぬ筈ぢや。五六十兩足るまいがナ。

七助 其通りぢやが、どうして足らぬな。

金六 知れた事。重三郎といふ道樂息子の仕業。育てるお袋が意氣地なし、それに死んだ旦那が呆痴者ちひさい時から奉公して、商賣に精出す此金六を養子にはせず、あゝいふ馬鹿者に此筒井の跡式を遺るといふ無分別。アレ、見い。奥の間で劍術に凝つて、エイヤットウの稽古。見世の算用の邪魔にこそなれ、あれが何になるものぞ。

七助 ほんに、呆れた息子殿。エイヤットウに凝つて、此財産を、棒に振らるゝてあらうぞい。

金六 そりや違ひない。そこであれが日頃の。(トいはうとして) イヤ、時に七助。聞けば此間、増田有宅といふ醫者が、四條河原で殺されたといふ噂ぢやが、いよくさうか。

七助 それ／＼。こなさんが心安い醫者の宥宅。四條河原でむがう殺してあつたげな。まだ其殺し手は知れぬとやら。自體、根が宿無しの悪醫者のゆゑ、誰も構ひ手はあるまいかい。

金六 ハテ、宥宅は無慚な死にやうをしたなア。

ト奥バタ／＼にて、仕事師長兵衛、面ぼう頭巾、股引にて、竹刀を持ち逃げて出る。あとより重三郎、着附け袴にて追ひかけ出るを、久三留めながら附いて出る。金六、七助立騒ぎ

金六 こりや若旦那重三様。何事でござります。

重三 何事とは、あの長兵衛めが、男に似合はぬ卑怯な奴。

長兵 ア、モシ／＼、若旦那。なんぼ男でも劍術の相手になつて、打たれたり、叩かれたり、手ひどい目にあうては、體が痛んで堪へられませぬ。

久三 コレ／＼。それで若旦那のいひつけ。其やうに面ぼうや竹具足をかけて居るではないか。

長兵 何を知つて、ちよこさいな。此やうな装束で、身が重うて働かれぬ。おれも洛中洛外で、人に知

られた鴨の長兵衛といふ仕事師。兵法や柔術なら、滅多にさすものではない。竹刀しなへの立合ひには、少し閉口々々。

重三 おのれ、正眼の太刀筋、みんめうの備へを教へてやらうと思ふに、馬鹿者ではあるわい。

金六 イヤ、若旦那。お前もよい加減に剣術を止めて、ちつと商賣の方に

重三 コリヤ、金六。いふな。母者人さへ、おれの剣術の稽古は黙つてござる。それに手代の分際て、ちよございな。(ト竹刀にて舞臺をトンと叩く。金六悔りして飛び退く。無駄をいふと、此竹刀でぶち据ゑるぞ。

ト此時向うより、彦三女房お路、手代惣八を連れて出て來り

みち コレ、惣八。汝も共々とつくりと、いうてたもや。

惣八 サア、私もこれまで度々頼みに行ても、聞入れが無いゆゑ、それで今日は新らしい、お前を連れて行くのでござります。

みち 其聞入きれの無いところへ、わしが行てお頼み申すも……つんと、どうやらトこなしあるな

惣八 ハテ、可愛いと思つてござる彦三様の、お爲ぢやござりませぬか。

みち サア、それぢやによつて、行くわいの。

惣八 そんなら、ござりませ。

ト唄になり、兩人舞臺へ來て、惣八、お路に「入れ」と思ひ入れする。お路うちくと入りかれるこなし。惣八無理に突きやる。それなりに内へ入り

みち ハイ、御免なされて下さりませ。

長兵 ヤア、お前は隣りの黒木屋の嫁御。

トお路、長兵衛を見て

みち オ、怖。(ト門口へ出る)

惣八 モシ、何てござります。

みち アレ、化物が居るわいの。

惣八 何を益體もない。晝中に化物が出てたまるものか。お前も若旦那と同じ事で、鬼瓦が怖いくと思つてござるゆゑ、何てもない事を。(トいひ、お路を連れて内へ入る)

長兵 ソリヤ又、手代と入り替つて來た。

惣八 ハ、ア。さては此形を見てお路様が

みち ソレ、化物ばけものであらうがな。

惣八 こりや御尤もでござります。

ト金六こなしあつて

金六 オ、隣りの惣八か。おりや貴様に、(ト立寄るを、エヘンと惣八目顔にてお路を教へる)オ、黒木屋の嫁御。手代の惣八。ア、聞えた。コリヤ又、此方こちの鬼瓦を、取つてくれいと、頼みにござりましたのか。

みち アイ、さやうでござりますわいな。

重三 コレサ、隣りのお二人。聞きや彦三は、此方こちの家根の鬼瓦を怖がつて、煩わづうて居やるさうなの。

惣八 ハイ、それで親旦那も、此お路さんも、それは、お心遣ひでござります。

みち ほんに、どうした事やら、わたしが方はうの彦三さんが、内方うちかたの鬼瓦を、怖こはい、と熱の謔言うはごと。それで御無心申しまして、どうぞお取替へなされて下さりませと、たび、お頼み申しましたが、使ひの者の不調法なやら、又申しやうのわるいのか、矢ッ張り家根に其儘あるさうにござりますが、御懇ろにいたしますお隣り同士の事ゆゑ、是非お頼み申したら、まんざらお聞き入れの無い事もあるまいし、おれがお頼み申しに行かうと、父様とよさまが申しますれど、御存じの通りお年寄りの事なれば、

ナウ、惣八。

惣八 ハイ。それゆゑ大隅名代おもむだいに、嫁御のお路さんに、私が附いて参りましたは、鬼瓦ゆゑだん、重る彦三様の御病氣。どうぞ鬼瓦をお取替へ下さらば、替へ瓦も、其お物入りも、私が方はうから

重三 コレ、惣八。そりや何いふのぢや。おれも京中きやうちゆうで知られた筒井重三郎。頼むとあれば、何時なんどきでも、取替へてやるまいものでもないが、其物入りを其方そつちからするとは、おれをさう未熟な者と見たか。

トむつとするを、金六わざと

金六 こりや若旦那のが御尤も。マア、お腹をお立ちなされますな。(ト無理になだめて)惣八、汝にも似合はぬ。今のやうな事いふと、おれでも腹が立つ。ナ。(ト重三郎に指さして)むかつかすはまだ早い。ナ。イヤサ、早う瓦を取つてほしくば、兎角氣の立たぬやうに、ナアお路さん。

みち さうでござります。今のは惣八が無調法。お免しなされて下さりませ。兎角使ひてはあ、いふ間違ひがござりますゆゑ。

金六 嫁御が見えてのお頼みなれば、コリヤ、若旦那、料簡して鬼瓦を、取つてやつたがようござります。

久三 もう京中きやうちゆうで、此方こちの瓦の事が、評判になつたぞえ
長兵 さうであらう。鬼瓦も取つてやつたがよし、おれが此装束も取つておかう。

ト面ぼうを脱ぎ、竹具足を取る。重三郎もこなしあつて

重三 そんなら此様子を、ソレ、皆の者。

長久 マア、阿母様へ。

ト奥より

たが イ、ヤ、滅多に鬼瓦を取る事はならぬぞ。

ト合ひ方になり、お高、篋盆提げて出て来る。

重三 そんなら、母者人、最前からの様子を

たが 残らず聞いたわいのう。

みち これはく、お袋様。此間このあひだはお目にか、りませぬが、あなたにもお變りなう、御無事でおめてた
うござります。

たが 隣の黒木屋の嫁御お路さん。聞きや、彦三殿の御病氣とやら、ほんに笑止な事てござんすなア。

みち 有り難うござんす。彦三様の御病氣といふも、只怖こはいくと、内方うちかたの鬼瓦を

たが 取つてくれいと、節々せつせつのお頼みなれば

重三 申し、母者人、どうぞ鬼瓦を

皆々 取つておやりなされますか。

たが イ、ヤ、取られぬわいのう。

みち エ、。

たが サア、なんぼ懸けんろな隣り同士どうしの黒木屋でも、鬼瓦はおろか、平瓦ひらがはら一枚でも取られぬ譯は、過ぎ近
かれし夫重むとむね右衛門殿、若い時分から身の油を絞り、稼とらぎ出して、今京中いまきやうちゆうで筒井つつみと呼ばれるほどに、
組立てさしやんした此家屋敷いへやしきに土藏どくらまで、重三が伴、孫の代まで、取締とらとどろはぬやうにと、心を盡
して丈夫に建てた檜造りひのきづくり。いかに夫むとが此世このよにござらぬとて、重三はもとより女子をんなのわしが、自由
がましう、ツイ鬼瓦でも取替へられませうぞ。朝夕あさゆふ拜む佛壇ぶつだんの、お位牌ゐはいの前へ、どうも言ひ譯が
ござらぬわいのう。

重三 でも、彦三が病氣とあれば、

惣そう八 親旦那のお案じ、家内の騒動。

みち 折入つてのお頼み、どうぞ、申し。

たが サア、水くさい事なれど、隣の息子彦三殿の病氣は、此方の倅重三が、煩ふやうには思ひませぬ。

みち そんなら、どのやうにお頼み申しても

たが たとへ重三が承知しても、わしが不承知。此様子を大隅殿へ、よろしう申して下さいませ。

みち 惣八。こりやマア、どうしたらよからうぞいのう。

ト當惑のこなし。

惣八 とんとこれで解つた。お路さん。百萬陀羅頼んでも、埒は明きませぬ。早う歸つて此様子を、親

旦那へ。サア、早う歸らつしやりませ。

みち ぢやというて、それでも。

惣八 ハテ、もうあみはあがつてござりますわいの。

長兵 あみがあがつたとは、病人には縁起のわるい。

金六 ハテ、餘所の事を構ひはない。

惣八 サア、ござりませといふに。

トお路を無理に引立てる。お路思ひ入れあつて、しほくと行かうとする。此うちお高直のんで居て

たが お路さん。待たしやんせ。

みち エ。そんなら聞き届けて

たが イヤ、瓦の事ぢやござんせぬ。病氣とある彦三殿へ、重三が母のこの高が、お見舞ひを進ませ

う。(ト合ひ方になり、お高縁先きにある鉢植を取つて来て)コレ、此鉢植は此間、六角堂の御縁日に參詣

して、求めて歸つた観音草。尤も秋の物なれど、春珍らしう葉の茂り、名さへ大悲の御名號。鬼

瓦は下さずとも、此鉢植を見て、本腹あるやうに、祈誓を掛ける観音草。わたしが志しと親子の衆

にとつくり見せて下さんせ。

ト鉢植を渡す。お路取つて

みち 何かは知らず観音草とやらの此鉢植を、お袋様の御見舞ひと、父さんや彦三さんに。

たが 折角ござんして、何の風情も。

みち 有り難うござります。

たが ようござんしたえ。

ト合ひ方になり、金六、惣八へ何か目顔でこなしある。惣八しかくあつて、お路鉢植を取つて向うへ

入る。金六、お高が手前こなしあつて

金六 隣の黒木屋も、しつかう瓦の事を頼みに來る程にの。

重三 イヤ、今の母者人のお詞では、もう頼みにも来まい。

たか コレ、重三。人の事ではない。其方も灸でも据えて養生して、必ず煩はぬやうにしてたもや。

重三 母者人とした事が、隣りの彦三と違ひ、此方は鬼瓦。

長兵 さうぢや。睨み附けてござりませ。

たか 長兵衛が何をいふやら。ほんに最前奥の圍ひに、釜が沸つてあつた。重三、一服點て、たもらぬか。

重三 畏りました。久三、水屋に水が無かつた。汲んで置け。

久三 ハイ、汲んで持つて参りませう。

七助 ドレ、おれも奥へ行かうか。

たか 年寄れば、外の物より茶が樂しみ。(ト向うをちよつと見て) 子を持つた親心。隣りの大隅殿はわが子の煩ひ。茶どころでもあるまい。それを思へば。(ト重三郎を見て、思ひ入れあつて) わしは果報。アア、南無阿彌陀佛。

ト唄になり、お高、七助、久三、共に奥へ入る。重三郎、金六、長兵衛残り

長兵 モシ、若旦那。お前もちやつと圍ひへござりませ。

重三 母のお望み。面白くない茶を點てすばなるまい。おりや矢ッ張り寶藏院流の槍を稽古したいが。

長兵 ナウ、否やのく。稽古ならお一人。

重三 エ、意氣地のない奴ではあるわい。

ト立上りてこなしあつて、腹を抱へ、「アイタ、アイタ」ト又下に居る。

長兵 モシ。何となされました。

重三 サア。今朝から稽古に凝つた加減か、胸先きから脇腹の方へ、何やらさし込んで。アイタ、アイタ。

長兵 ドレ、おれが擦つてあげませう。

ト後ろへ廻り擦る。此うち金六片脇へ寄つて思案して居る。此時フツと思ひ入れあつて

金六 オ、さうぢや。とんと忘れて居た。蟲がかぶるとは幸ひ。

ト仰山に手を打つ。長兵衛悔りして

長兵 エ、金六殿、何ぢや。仰山に手を打つて、悔りするわいの。

重三 それにおれが蟲のかぶるを、幸ひとは。

金六 エ、……サア、幸ひというたは。オ、若旦那々々。あなたがお腹が痛むなら、服まさう

腹まさうと思つて、調へておいた結構なお薬がござります。それをあげうと思つて、それで幸ひ

と申しました。

重三 そんなら結構な薬を持つて居るか。

金六 まづ、第一は男の心痛、癩、つかへ、何でも腹一通りの妙薬。即ち爰に。(トいひひく、紙入れより、序幕の毒薬を出して) 此薬を白湯さゆに掻き立て、あがりますが最期、すぐに、サア……すぐに驗けんが見えて、さつぱりとよくなります。それは受合ひ。眼前わたしが試みさせておいた薬でござります。

重三 さういふ結構な薬なら忝かたじけなくい。早う服くすりまうわい。

金六 あがりまするか。それを待つて居りました。(トしてやつたといふこなしにて) コリヤ〜長兵衛。お白湯さゆを早う、汲くみんでおぢや〜。

長兵 合點あてまぢや〜。

と茶碗へ湯を注ぎ、持つて来る。

金六 さらば此お薬を。

ト茶碗へ薬を入れようとして、思ひ入れあつて、袖にて鼻を押へ、茶碗へあげ、掻き立て、こなしあつて、重三郎が側そばへ持つて来て

サア〜一口ひとくちにグツとあがりませ。

ト重三郎茶碗を取上げ

重三 結構な薬とあるからは、すぐに利きくてあらう。

トいひながらグツと飲む。

金六 長兵衛々々々。お脊中せぢちゆうを擦すれ。

長兵 心得た。

ト又脊中を擦る。金六思ひ入れあつて、重三郎が顔を眺め、もう毒が廻つて来るかと喜ぶこなしにて

金六 モシ〜、若旦那。お心持ちはどのやうにござりまするな。

重三 サア、心持ちは。どうやら脇腹わきはらがきり〜と。アイタ、〜、〜。

ト脇腹を押へてこなしある。金六喜び

金六 そりやこ〜。

重三 ハテ、無性に痛むが。

金六 其咎とがぢや。秘傳ひでんの毒薬。

長兵 ヤア、何ぢや、毒とは。

金六 イヤサ。たとへ毒でも立ちどころに解す、解毒の薬ぢやといふ事でござります。

ト重三郎恠り、こなしあつて

重三 コリヤ、長兵衛。痛んだ筈ぢや、これを見てござれ。

ト團ろより針を出す。長兵衛取つて

長兵 こりや絹針ぢやが、どうしてこれが

重三 サア、襦袢の脇の縫ひ目に入れてあつた。それをやうく取り出した。

長兵 めつさうな。針を残して置くやうな事があるものか。

ト金六合點のゆがぬこなしあつて

金六 モシ、若旦那。お前お心持ちは

重三 さつぱりと快くなつた。

金六 エ、あのきりく、脇腹が痛むとおつしやつたは。

重三 サア、痛い筈ぢや。襦袢の縫ひ目に針があつたもの。

金六 アノ針で……めんような。其筈では無いが。

長兵 どうでもあのお針めは、そ、つかしい奴ぢや。

ト此うち金六いろく思ひ入れあつて

金六 此間大枚の金を出して今の……サア薬が

重三 結構な薬ぢや。痛む胸がさつと開けた。

金六 彼奴はマア、どうせう知らぬ。

長兵 よい薬ぢやげな。嗜みに持つて居やんせ。

金六 何のよい薬。モシ、若旦那。

重三 ヤア。

金六 お前はマア、高い薬を、よく服まつしやりましたな。

ト恨めしさうにいふ。

重三 金六。其方の庇で氣色が快くなつた。これから母者人へ茶を點て、進せう。長兵衛。汝も奥へ來い。

ト唄になり、重三郎、長兵衛を連れて奥へ入る。金六一人残り、呆れた顔にて

金六 めんような。此間祇園で試みさした時にはひりく。それに今のは針、思ひ廻せば、どうしても宥宅めが己をいかさまに……彼奴を捕まへて、といふ宥宅めはもうてこねるし、こりやマア、何の

事ぢや。(ト合ひ方にて、思ひ入れあつて)かねて此筒井の家を丸呑みにして、ぞつこん惚れて居る半兵衛が女房おりくを、無理に引取つて己は旦那株。時に牒し合せた隣りの惣八。何かの手段を首尾ようやりつけ、黒木屋の財産も、おれがしてやるつもり。最前目顔で知らせておいたが、隣りの惣八が、何ぞ便りをしさうなものぢやが。

ト橋が、リの方の黒髯を見る。髯の中より石を括りつけた封じ文をバツマリと投げ込む。金六「さては」と右の状を取上げ、上紙を取つて中の状を出して開き

「一筆申し上げり、今宵人目を忍び、彼の事を首尾よくなした下され候は、御嬉しく存じり、何事も阿母様へ知れ申さず候ふやう、兎角申し合せし通り、此方の心の程御察し下され、宜しく願ひ上げり、何事もお目もじの上、先づは此文ひそかに御覽、めでたくかしこ。筒井重三郎様へ。路より。」

ト讀み終り

こりや隣りの嫁御の直筆。これでは何にも知れぬ。

トいひ、封じた白紙を取上げ

白紙の此封じ。酒といふ字を一字書いておいたは……エ、こりや己が教へておいた、酒で書い

し干上れば、此通りの白紙。これを又現はす時は。さうぢや。

ト火鉢を取つて来て、右の封じ文に附けし紙をあぶると、赤く文字現はれる。金六「これを見て

かねていひ合せし通り、其方の息子と此方の嫁と、不義して居る體に見せ、山を明けて兩方に、物言ひをつけ、こなたと己と望みを叶へんと望むところ、今日幸ひ鬼瓦の事に付き、連れて参り、固意地な阿母を幸ひ、重三を頼み、鬼瓦を取らすやうにしてあれば、ちよつと頼みの文と、我等文言を好み、騙して書かせし此文にて、其方を宜しく、此方は先達ての重三が似せ筆の手紙を、彦三が先づ寢所へ落し候へば、氣遣ひなく、萬事手番ひぬかりなく、御返事は酒にて、待ち入り候。」

ト讀みじまひ、思ひ入れあつて

彼奴も粹ぢや。互ひの宛名書かずに、味をやり居つた。そんなら此文で此方の息子を……ムウ。よし。此方もぬからず、隣りへ返事は。(ト銚子鍋、硯箱を取つて来て)此酒で、さらば返事を、書いてやらうか。

ト二重舞臺へ上り、紙を廣げ、銚子にて筆をなしめし、酒にて返事を書く。此見得、チョン〜にて、

返し

道具ぶんどす。これより隣りのこゝろ。懸け板に仕掛けあつて、これより黒木屋の場と返しにて出る。造り物、同じく二重舞臺。見附け世話。上方折り返し障子家體。いつもの處に門口。幕明きに下方にあつた黒塀、上方へ直り、梅の樹木見事に、枝は樂屋の方へ出てあり。此上の高欄に切り獲。家根に丸に大の字の棟瓦よろしく。橋がりの下座、後ろへ寄せて、筒井の門口。これより出入りあり。すべて黒木屋の模様にて、てんつゝ、バタ／＼にて、道具とまる。
ト牛飼ひ五郎吉、鉢巻き、大肌脱ぎ、鉞を振上げ、駈け出さうとするを、惣八、松兵衛、手代の形、その外二三人の手代留めて居る。二重舞臺の上に、黒木屋大隅、お路が持つて来た観音草の鉢植を前に置き、思案して居る。

五郎 コレサ、惣八。皆の衆。留すと、離したく。

松兵 コレ、待て、五郎吉。親旦那のいひつけも無いに、汝が駈出す事はない。

惣八 さうぢや。松兵衛がいふ通り、今の先きにお路様を連れて、此惣八が行て頼んでも、隣りのお袋固意地で、取つてくれぬ鬼瓦。それを出入りの牛飼ひぐらゐの汝が行ても、隣りて滅多に得心はせぬわいやい。

五郎 ハテ、得心せにやア鬼瓦どころではない。コレ、此鉞で、筒井の屋臺骨を打ち毀すのだ。留すと退かつしやい。

皆々 イヤ／＼、待てといふに。

五郎 何を。

ト皆々を振切り、擲り退け、立廻りにて行かうとするを、二重舞臺より

大隅 五郎吉、待て。ソレ、皆の者、留めい。

惣八 ソレ、親旦那の仰せぢやぞ。

皆々 五郎吉、待たぬか。

トこれにて、こなしあつて

五郎 親旦那様。これまで代々、八瀬、太原から、黒木を附けて牛曳いて来る、お出入りの五郎吉。様子を聞けば、隣りの筒井の鬼瓦ゆゑに、若旦那の御病氣、瓦をおろしてくれいとお頼みあつても、聞届けねば、かけかまはぬ私しが、隣の家を打ち毀しても、瓦を取らせて見せませう。これ皆内方のお代。それを何で留めさつしやるのだ。

大隅 オ、殊勝らしい。親の代から出入りするよしみに、俸が事を思つて、其方が志し過分なが、今毀すの何のと荒立てゝは、町の沙汰になるも氣の毒。隣りも知れた、筒井といふ吳服屋。此方は大内へ黒木を入れる、お納戸御用。殊に、梅園家へはお出入り、それでおねは、大隅と受領の身の上なれば、兎角物事慎んで、隠便にせにやならぬ家柄ぢやわい。

五郎 ぢやとて、若旦那様の御病氣が、だん／＼重るぢやござりませぬか。

大隅 サア、それゆゑにこそ伴を思ふ、心は闇にあらねども、邪怪な隣りの阿母、併し病氣見舞ひと嫁のお路が、持つて戻つた此鉢植は、観音草。これを送つた心が、まだどうも解せぬ。

ト又鉢植を見て、思案するうち

惣八 コリヤ、五郎吉。若旦那の御病氣を、ちよございな汝が工面。此の黒木屋の内には、汝より年嵩な、通ひ番頭の半兵衛といひ、重手代の此惣八も居る。それに一人も智慧の無い者が寄り合つて居るやうに、慮外な牛飼ひめ。似合つたやうに、きり／＼牛を曳いて歸りをらう。

五郎 イヤ、歸らぬ。番頭の半兵衛様は知れた事、此家の白鼠。外の奴等は黒鼠、日頃から若旦那を煽てあげ、共に狂ふ斑ら鼠の大鼠め。おツつけ猫に咬まれ居らうと思つて、にやんまみだぶつ。

松兵 何を馬鹿にしさらす丁稚め。おのれ、引き出して

トおのれを、五郎吉立廻つて見事に取つて投げ

五郎 ほて、んがうすると、汝を

ト鉢を振上げる。

松兵 コレ／＼、それで打つて堪るものか。

惣八 おのれ、マア

ト寄らうとするを

五郎 どうぞするののか。

ト又鉢を振上げる。惣八こなしあつて

惣八 ハテ、此京に似合はぬ、荒つばい若衆めぢやなア。

ト控へる。障子屋體バヤ／＼にて、彦三、掻巻にて、黒の病ひ鉢巻きをして

彦三 恐ろしい／＼。鬼瓦が恐ろしい。ちやつと逃げねばならぬ。退いてくれ／＼。

みち マア／＼、お待ちなされませいなア。

彦三 どうも爰にはをられぬ。

トいひ／＼、狂ひ出るを、お路、岩松兩人にて、介抱しながら出て来る。大隅も立上り

大隅 ヤア又、俵が

みち 熱が出ましたわいなア。

惣八 もう死なつしやるかな。

五郎 何を縁起のわるい。

ト惣八を擲りのける。

岩松 モシ、若旦那、彦三様。

みち お心を鎮めて下さんせいな。

大隅 岩松よ。ちやつと薬を取つて来いやい。

岩松 アイ〜。

ト奥へ入る。皆々介抱する。彦三は大隅を見て

彦三 申し、親仁様。お路。五郎吉か。おりやもう隣りの鬼瓦が、恐ろしうて〜、どうもならぬ。それで此家に、をられぬ〜。

大隅 ソレ、留めてくれ〜。

ト彦三立上るを、五郎吉留めて

五郎 しつかりと留めてをります。

みち モシ、彦三さん。氣を慥かに持つて下さんせいなア。

彦三 サア、氣は慥かに持つては居るが、隣りの鬼瓦が睨みつけてをると思へば、目先きへちらついで、どこぞへ逃げたい〜。

惣八 その逃げたい時は、祇園町の彼の處へ

五郎 又ちよ〜さいな。

トきつとなるを

惣八 嘘ではなし。

トこなしあつて控へる。奥より岩松薬を持つて出て来て

岩松 サア〜、お薬を温めました。ちやつとこれを。

みち 待ちかねたわいなア。(ト茶碗を取つて) サア〜、申し。マア、お薬を。

彦三 イヤ〜、薬ならよしたも。

大隅 ハテ、悴、おれが氣休めに。

五郎 一口でもあがりませ。

ト彦三服まねを、皆々勤めるゆゑ是非なく

彦三 そんなら。

トぐつと服む。しか〜あつて

みち 彦三さん。どうでござんすえ。

彦三 オ、これてどうやら……人心地になつたやうな。
大隅 ア、嬉しや。

ト皆々安堵の思ひ入れ。てんつゝにて、向うより半兵衛、着附け、羽織、素焼すやきの猿さるの人形を持って出て来て、内へ入る。

松兵 これは番頭様。

惣八 ほんに半兵衛殿。こなたは今来たか。

半兵 今日こんにちはちつと用があつて、大佛邊へ行つての歸りがけ……これは親旦那。見れば、若旦那も端はし近ちかう。まづ、御容體はどのやうにござりますな。

大隅 相も變らず、隣りの鬼瓦の事はつかり、いうて居るわいの。

半兵 ムウ。さやうなら、隣りは矢ッ張り不承知て。

みち 最前もわしが頼みに行ても、聞き入れて下さんせぬわいの。

五郎 番頭さん。こりやお前、御思案はござりませぬかえ。

半兵 サア。只鬼瓦を怖こはがつての、若旦那の御病氣。隣りを頼んでも、瓦を取替へぬとあるゆゑ。(ト右の猿を見せ)これは若旦那へ、御病中のお慰みにもと、土細工つちさいなれど、鬼瓦よりは殊勝しゆせうらしい親子

猿。モシ、お路様。これを、

トお路に渡す。お路取つて

みち ほんに、可愛らしい、子猿を負うて居る親猿。半兵衛殿の志し、彦三様、御覽ごらんじませ。

ト彦三の前へ置く。彦三取つて見て

彦三 オ、成程。同じ土でも、こりや鬼瓦よりは違つた物。面白いわいの。

ト餘念なく見て居るこなし。半兵衛思ひ入れあつて

半兵 まづ、お氣に入つて、私も喜びます。

トこなしある。唄になり、向うより桂佐市、繼ぎ上下、御所侍ごしよざむらいひにて、一僕連れて出て、「ソレ」と家來に案内させる。

家來 頼みませう。

惣八 どなたでござります。(ト出迎ふ)。

佐市 イヤ、桂佐市でござる。大隅在宿かな。

ト内へ入る。大隅、佐市を見て

大隅 これは、佐市様。よう入らつしやりました。まづ、これへ。

佐市 然らば、皆免しやれ。

トずつと上へ通る。惣八、蓑盆を持って出て

惣八 思ひがけない、佐市様のお出で。まづ、お蔭を召し上がりませ。

佐市 イヤ、構やるなく。(ト半兵衛を見て) 番頭半兵衛。別條無いの。

半兵衛 これは、有り難うござります。

佐市 其外御家内にも……イヤ、承れば、子息彦三殿には、病氣とやら噂があるが、さやうか。

大隅 御覽の通り、悴が病氣。それゆゑ御殿へも上がりませぬ。其段、眞平御免下さりませう。

佐市 イヤ、當黒木屋親子は、代々御主人梅園中將家へお出入りなれば、御所にも外ならず思し召

すに付き、このたび姫君鎌倉へ御婚禮あれば、世に珍らしき調度を御持参。それゆゑに、先きだつて、彦三に仰せつけられし、紫式部若菜の硯吟味の儀、五日以前に、當所にて買ひ求めしとあるが、それより何の沙汰も聞かず。最早近々、鎌倉へお興入れあれば、いよく右の硯手に入りあらば、今日受取り歸らん爲、佐市わざ／＼参つてござる。

大隅 成程。其硯の儀は、悴彦三が働きにて、藪の下の道具屋にて、三百兩にて買ひ求めると申したゆゑ、此方の兩替へ、振り手形を遣はしましたゆゑ、相濟んだてござりませう。何時でもお渡し申

しませう。

佐市 然らば兩替への金子三百兩。持参致した。(ト圍中より財布入りの金を出して、大隅に渡し) 金子改めで、受取りいされ。

大隅 お出入りのお家。それには及びませぬ。

佐市 イヤ、別御用なれば苦しい。是非受取りめされ。

大隅 さやうなれば、三百兩は、お戴き申し上げます。

ト右の金子を受取る。惣八これを見て、思ひ入れある。

佐市 此上は一刻も早く、右の硯、受取り申さうか。

大隅 大方藏に仕舞つてあるてござりませう。何時でもお渡し申しませう。ソレ、嫁女。此様子を、ちやつと彦三に。

みち アイ、モシ、若菜の硯を佐市様が、お受取りにお出でなされましたが、藏のどこにござりませぬ。(ト彦三泪ぐみ、物いはずに居る)。但しあなたの書棚へおしまひなされたかえ。申し。大切な硯は、どこにござりまするぞいなア。

ト彦三矢張り物いはずに、ハツと心意氣ある。惣八幸ひと側へ行て

惣八 モシ、若旦那。お前が受取らつしやりましたお硯は、どこのござりまするな。……これはしたり。なぜ物をいはつしやりませぬぞ。

ト大隅も側へ寄り

大隅 倅、どうぢや。

みち モシ、彦三様。

五郎 又お心持ちが、わるうござりまするか。

トこれにて彦三、ムツクと起上り

彦三 アレ、又隣りの鬼瓦が来るわいの。こりや堪らぬ。逃してくれ。

ト駆出さうとするを、それはと皆々留める。彦三振切り、「怖い」と出ようとするを、中兵衛皆々を押退け、彦三を抱留め

中兵 コレ、若旦那。大事ござりませぬ。マア、お待ちなされませ。

彦三 イエ、それでも鬼瓦が。

ト振切るを、しつかりと留めて

中兵 ハテ。硯の事は、イヤサ、硯の事をお尋ね申しても、此大熱では、なか／＼申されますまい。若

旦那、大事ござりませぬ。何もかも此半兵衛が、イヤサ、此半兵衛がとつくりとナ。(ト彦三と兩方へかけて) サア、御介抱申して、熱がさめたら硯の事を申しませうほどに、あまりふわそわせず、マア、ちつとして、落ちついてござりませ。

ト始終彦三へかけて、サツと下に置く。

佐市 いかさま。見受けた様子が彦三の病氣、こりや大隅はじめ家内の心配。

大隅 お詞の通り、私しが心づかひ、御推量下さりませ。まづ佐市様には、暫しの間。

佐市 奥へ參つて半兵衛が返答、相待ち申さう。

中兵 すりや、硯の儀を

佐市 とつくりと尋ねて、身共へ

惣八 イヤ、合點のゆかぬ若旦那。

ト彦三へかゝるを、中兵衛引廻して

中兵 ハテ、此家を取裁く、番頭が居る。惣八、番頭の采配はまだ早い。

惣八 ヤ。

中兵 控へて居やれサ。イヤ、お路様。佐市様を奥の間へ。

みち さやうなれば、佐市様。

佐市 大隅もろとも。

大隅 兎角忤が事を

半兵 お案じなくと、まづ奥へ。

五郎 モシ、半兵衛様、

半兵 ござりませ。

ト眼になり、お路案内にて、佐市、大隅、彦三へ思ひ入れあつて、惣八、松兵衛、岩松、五郎吉よろしくこなしあつて入る。跡に半兵衛、彦三残る。彈き流しの合ひ方にて

半兵 若旦那。お心は鎮まりましたか。

ト彦三こなしあつて

彦三 半兵衛。(ト半兵衛の顔をキツと見て) 此彦三はノ。(ト様子はいはうとして、いひかれるこなしあつて) ひよんな病ひに、取りつかれたわいのう。(ト少し愁ひの心)。

半兵 サア、其様子は私しも。(ト思ひ入れあつて、奥口へ氣をつけ) イヤ、醫者でなければ病根は存じませぬが、モシ、若旦那、病ひは氣からと申す事もござりますれば、何も其やうに、きなくと思はつ

しやりますな。及ばずながら、此半兵衛が居ります。モシ。……高うはいはれませぬが、お前がいひ交してござる、祇園町の小吟殿は、私しが爲には、正木半兵衛というた以前、侍ひの時の故主の娘御。大恩あれば、粗略にはならぬお人。殊に、今のお主といふは、あなた御親子。いづれ大切にせねばならぬ私しなれば、たとへ命は捨て、も。ア、イヤ、さういふ事もござりますまい。若旦那、御病氣のあなたに、此やうな無駄な事を申さうよりは、ソレ、最前、私しがお目にかけた、土細工の猿を御覽じましたか。

ト彦三以前の猿を取上げ

彦三 アノ、此猿の事か。

半兵 サア、其親子猿は、大佛から歸りに、五條坂の人形見世に出てあつたを、あなたへお目にかけうと思つて、値段を聞いて、とつくりと見た所が、尤も細工はよけれど、ソレ、御覽じませ、親猿の上に子猿が肩車。何ぼう畜生ぢやというて、此猿は不孝な奴と思ふから、細工人の人形屋へ、いかにしても親の肩へ子が乗つて居るは不幸者。此子猿を離して賣つてくれまいかと申したれば、其人形屋が、成程と、矢庭に鐵鏈を持つて来て、子猿を離しませうと、既に打ちはなさうとして、申しまするは、イヤ、何ぼ親に不孝な忤でも、こりや一所に、此やうに、作りあげた焼き

物ゆゑ、今、子猿を鐵鏈かねづちで叩き離せば、親猿も満足にはあるまい。定めて一所しよに毀こはれるであらう。こりや此儘に求めてくれい、というたは、何と、尤もぢやござりませぬか。

彦三 成程。其子猿を取らうとしたら、親猿も毀こはれさうなもの。

半兵 それぢやによつて若旦那、イヤサ、若旦那、あなたのお慰みに、買つて戻つた其猿を御覽ごらんじて

彦三 病氣のつれなく、心の慰み、

半兵 隣りの家の鬼瓦よりは、四條河原で

彦三 ヤ。

半兵 槌かに醫者を、イヤサ、醫者の見たてよりは、素人の此半兵衛、

彦三 おれが病ひの

半兵 ソレ、根本こんぽんの療治りょうぢから、取鎮めて癒なほすのが、番頭の私しが配劑。

彦三 半兵衛。其方そなたの志しの

半兵 其猿を毀こはさぬやうに

彦三 もし毀こはせば、此猿も、彦三ひこさぶも元の土つちとなる。

半兵 サア、それが否いやさに。マア、とつくりと、御養生をなされませ。

ト腹になり、彦三思ひ入れあつて、猿を持って奥へ入る。半兵衛残り、こなしあつて、思案するところへ、思ひがけなく板扉の彼方より、石の附いた白紙の封じ文ぶみ、半兵衛が前へパツタリと音して落ちる。

思ひがけない。こりや何ぢや。(トいひく)取上げ見て見れば、何にも書かぬ封じ文ぶみ。どこから投げ込んだか知らぬ。(ト封を切り、中を見て)矢ッ張りこれも白紙しろかみ。(ト上の方の扉を見て)あの板扉の彼方は、隣りの筒井。(ト此時、此方こなたの家根の瓦を見て)アレ、此方こなたの棟瓦むねがはしに、丸に大の字の印しと向ひ合うて居る。(ト臆病口の方を見る心にて)隣りの筒井の鬼瓦、あれが若旦那の病ひと世間ていへど、(ト障子屋體を見て)まだお若いゆゑに、(ト思ひ入れあつて)イヤ、それよりは此白紙しろかみ。(トよくく見て)ムウ。とつくり見れば、こりや「酒」といふ字が一字書いてある。……エ、聞いた。酒で文字を書いて、乾かし見れば、矢ッ張り白紙。これを又火で炙れば、きつぱりと、書いた文字が現はれるといふ事は、大概人も知つたあざとい事。そんならこれも酒で書いて。何にもせよ。

ト火鉢を取つて来て、右の白紙の状を炙る。仕掛けにて吹替へにて、白紙へ文字現はれる。

さてこそ、推量の通り、現はれし此文字。……ナニく。先き程の娘のお路が、鬼瓦の文を色事の文の作意。どうもく、あつぱれ感心致し候。然れば此方こなた息子重三郎に、右の文を見せ、大山やまを擧げ申すべく候。先達で渡しおく似せ筆の状にて、彦三に腹を立てさせ、其方家内を騒動さ

すること肝要に御座候。委細は兼ねて牒し合せし通り、お取計らひ下さるべく候。まづは御返事
までに、早々。」此筆は、(トとつくり讀んで見て)こりやこれ、互ひの宛名を書かぬは、まさかの時
の用心。棟續きに二人の悪者。大方知れた白紙の手紙。山をあげるとあれば、其時丁度(ト右の書
き物丸巻き、懐ろへ入れ)こりやよい物が、手に入つたわいの。

トこなしあるところへ、手代一人、風呂敷包を持って、走り出て来て

手代 黒木屋様は内方ぢやな。お誂への鍾馗の瓦を、持つて参りました。

半兵 オイ。大竹屋からごんしたの。

手代 さやうでござります。番頭の半兵衛様に渡せと、親方が申し附けました。

半兵 半兵衛は己ぢやが、早う出来た。ドレ〜。(ト風呂敷を開き、鍾馗の瓦を出して)思つたより格好が
よい。慥かに受取つた。

手代 お渡し申したら、もうお暇申します。

半兵 お大儀々々々。

ト手代は引返して向うへ入る。此うち始終合ひ方。半兵衛こなしあるところへ、奥より大隅、佐市、連
れ立ち、出て来て

大隅 半兵衛。佐市様へ先き程の御返事を。

佐市 此方も御婚禮の御支度、萬端に心急ぎなれば、硯の在り所、彦三にとツくと聞き

半兵 成程、其祝の儀は、(ト思ひ入れあつて)サア、まだ若旦那には御病氣、しかと致しませぬば、こりや
斯うなされて下さりませ。改めて此半兵衛めが、佐市様へのお願ひ。長うとも申しますまい。何
卒今三日、お待ち下されませすまいか。三日の内には、是非若旦那も御本腹あつて、右の硯を、
屹度御所へ、持参致させませう。

佐市 ハテ、思ひがけない、三日の日延べとは。

大隅 半兵衛。合點がゆかぬ。そんなら、悴は、大切な硯を、どうぞしたか。

半兵 イヤ、さやうではござりませぬ。まだ若旦那の口から承りませぬど、硯は慥かに、(ト思ひ入れあつ
て)イヤサ、慥かに敷の下の道具屋が、所持して居たを買ひ求めて、持つて居ますれど、……
サア、何をいふにも……御病氣ゆゑ、とんと事が解りませぬ。それゆゑに、私しが

佐市 三日延せば

大隅 悴は本腹、硯をお渡し申すとは。

半兵 これ御覽じませ。

ト右の鐘馗の瓦を取つて来て、前へ置く。

佐市 こりや珍しい鐘馗の瓦を、棟瓦にとは。

大隅 さては俵が鬼瓦を、怖がる病氣ゆゑ。

半兵 隣りを頼んでも、下さぬとあるゆゑ、そこで私しが思ひついたる、此鐘馗の棟瓦を、此方の家根へ上げれば、鬼に勝つは鐘馗。これで何と若旦那の御病氣は、御本腹ありさうなものぢやござりませぬか。

佐市 いかさま、世には、呪ひといふともあれば、これも理の當然。

大隅 兎角親方思ひの半兵衛が計らひ。私も現在俵の事なれば、佐市様へ共々にお願ひ。

佐市 半兵衛。然らば三日の内に

半兵 きつと硯を、差上げませう。

佐市 お出入りなれば、外ならぬ大隅親子、身が執成し致して、御所は宜しう三日の日延べ、御承引あるやうに、申し上げてくれう。

半兵 エ、有り難うござります。

佐市 必ず日限相違無きやう。最早身共は

大隅 お歸りなされまするか。

佐市 お興入れ前、御用も繁多なれば。

半兵 御苦勞に存じまする。

佐市 半兵衛。吃度詞を番うたぞ。大隅、さらば、

ト唄になり、佐市家來を連れ、こなしあつて向うへ入る。跡に大隅、とつおひつ、いろ／＼思ひ入れあつて、半兵衛が側へ行つて

大隅 半兵衛。どうも合點がゆかね俵が病ひ。殊に、大切な硯の事も。

半兵 ハテ、何もお案じなさる事はござりませぬ。皆私しが引受けて、最早若旦那の御病氣も、御本腹あるやうに、思ひ附いたる此瓦。物はためし、早く家根へ上げるやうに。

大隅 成程。俵が本腹とあれば、心嬉しい。皆にいひつけて、上げさう。兎角俵が身の上を、半兵衛、其方に。

半兵 ハテ、これまで御恩にあづかり、今別家して居る私し。それに如才は。(トこなしあつて) マア、何かは奥で、とつくりと。

大隅 そんなら、其方も。

半兵 マア、お出でなされませ。

ト唄になり、大隅、半兵衛を連れて奥へ入る。引違へて惣八、松兵衛を連れて出て来て

松兵 コレ、惣八殿。最前佐市殿が持つて来た金は。

惣八 コレ。(ト最前の財布を出し) まんまとせしめて来た。此上は隣りの金六と、いひ合せた通り。

松兵 何もかも手つがひよう行た上では。

惣八 松兵衛、汝も番頭ぢや。喜べ〜。

松兵 そりや忝い。盗んだ其金、見附けられぬやうに。

惣八 サア、どござ新らしい、よい隠し所が、ありさうなものぢやが。

ト此うち奥にて

五郎 ハイ〜、畏りました。

トいひ〜五郎吉出る。惣八右の財布をちやつと隠し

惣八 五郎吉。畏りましたとは何ぢや。

五郎 こなさん達もいひつけられた。鍾馗の瓦を早う取替へいとおつしやつてぢや。それで己も手傳ひに来た。

ト松兵衛、鍾馗の瓦を取つて来て

松兵 取替へる瓦は、大方これであらう。エ、面倒な。家根へ上がらずばなるまい。

五郎 若旦那のお爲ぢや。早う上がったがよい。

ト惣八思ひ入れあつて

惣八 よし〜。おれが家根へ上がつてやらう。五郎吉、梯子を持つて来い。

五郎 合點ぢや。

ト梯子を取つて来る。惣八板塀へ掛け、家根へ上る。松兵衛、五郎吉、瓦を持つて行く。此うち三人捨

ぜりふにて、五郎吉も梯子半ばより瓦を差出す。惣八先きの瓦を取るうち、家根にて財布を落とす。

五郎 惣八殿。落したのは何ぢや。

惣八 イヤ、何でもなし。(ト瓦のうしろへちやつと押し込み) サア、そちらの瓦ぢや。

五郎 ソレ、鍾馗。

ト渡す。惣八受取り、棟瓦の處へ押し附け、こなしあつて

惣八 どうぢや、格好は。

松兵 大分よい。下地よりは目に立つて

五郎 隣りの鬼瓦を睨み返して居る鍾馗大臣。若旦那の御本腹の瑞相ぢや。

ト此うち惣入梯子より下り来て

惣入 あゝして置けば、滅多に人の氣の附く氣遣ひがなくてよいワ。

五松 よいとは何が。

惣入 イヤ、瓦の格好が。

松兵 そんなら旦那に

五郎 お知らせ申さうか。

惣入 ドレ、おれも一所に行かうか。

ト合ひ方になり、惣入、五郎吉こなしあつて、松兵衛附いて奥へ入る。障子屋體より彦三、腹の立つたこなしにて出て来る。これをお路なだめく出て来て

みち コレイナア、彦三さん、其やうに腹立てずとも、今の文をどうぞ見せて下さるな。

彦三 エ、見せる事はならぬといふに。あたしつこい女ぢや。

みち サア、其やうに怖い顔して、腹立てさしやんすも、大方御病氣の業でござんせうが、ほんに、これまでつひぞ嘘にも、小吟さんの事いうて、格氣した事はござんせぬぞえ。

彦三 オ、格氣せぬ筈。一體、(トお路の胸ぐら取つて引寄せ、顔をキツと見て)おりや男ぢや。それで何にもいはぬぞよ。(ト泣き、離す)。

みち オ、怖つひぞない、其やうにマア。(トさからはぬこなしにて)もうく御堪忍なされて下さりませ。

私も何も、申しませぬ。

彦三 又いうて堪るものか。エ、おのれ、親仁様の聞え、世間を思はねば、いひまくりたいけれど、家柄といひ、それでぢつと堪へて居るぞよ。

ト身をそむけ、思ひ入れある。お路こなしあつて

みち お前はマア、何を其やうに。(ト涙ぐんで)今寝間に落ちてあつた文を、わたしが見ようとしたら、ちやつと取つて隠しなかつたゆゑ、大方小吟さんの方から来た御病氣の、つい見舞ひぢやと思つて、ちよつとお見せなさんせというたが、其やうにお腹が立ちますかいなア。

彦三 オ、腹が立つてく、もうどうも堪へられぬけれど、……ぢつと辛抱して居るわいやい。

みち モウ、拜みますく。わたしがわるかつた。其やうに腹立てずと、機嫌を直して下さるなア。

彦三 機嫌も、直る時分には、直らうぞい。

ト彦三も涙ぐんでいふ顔を見て、お路も思ひ入れあつて、ほろりとして

みち ほんに、同じ女子をなごに生れながら、色里いろざとで勤めする女中さんは、どうして殿御に可愛がられさんすものぢややら。怪氣嫉妬は知れた嗜みと、二親のいはしやんしたを、随分守つて、つひぞこれまで河東かはのがしへござんしても、怪我にも不請ふじやうな顔をせず、小袖に伽羅とめ、お鼻紙、葎入れまで氣を付けて、殊に、馴染んでござんす小吟さんに、つひぞ逢はねど、文ふみやつて問ひおとづれ、只お頼み申す大切に、といふより外に怨みの「う」の字も、書いたとはござんせぬわいなア。サア、さうした此わたしが心を、常から知らしやんせぬてはなし、其文ふみが見せられぬとは、大方わたしを去つて、女房にならうといふやうな、胸愆むねあやまな文でござんせう。それとは知らず、つい見せなさんせというたゆゑ、それで其やうに、お腹が立つのでござんせうわいなア。

トしやくりあげて泣く。彦三これにて猶々ムツとして

彦三 おれが寢所ねどにあつた状を、小吟から來た文ふみと思つて、わざと迷懷をいふ。見す／＼知れた逆さかねだり。それで其身をくるめようと、ほんに、日頃ひごとに似合はぬ、女子をなごといふものは、チモ、心の恐ろしいものぢやなア。

みち モシ、何といはしやんす。わたしが身をくろめようと思つての迷懷とは、何ぞ此身に誤りてもあつて。

彦三 オ、誤まりも誤まり、大それた誤まりがあれど、よもやと思ひ、マアとつくりと驗たのした上てと、ぢつと堪こへて居るを、それに最前から

みち イ、エイナア、そんならわたしが

彦三 不義して居る。

みち エ、。(ト大きに悔りする。)

彦三 おれが目を掠めて、お路、わりやよう密夫みそかを拵なへたな。

みち モシ。そりや何の事でござんす。不義ぢやの、密夫みそかぢやのと、身に取つて

彦三 覺えがないとはいはさぬ。コレ、此状。(ト懷なるより出して)小吟が文ふみと見たがつた此状。とつくりと讀んで見をれ。

ト打附ける。お路おろ／＼して状を取上げ開き

みち 此間このあひだはよき首尾にて、ゆる／＼と御話らひ申しあげ、山々嬉しく存じら／＼。さて其節申しかはせし通り、道ならぬ事とは存じながら、互ひに馴染みし上は、兎角ひとと人目を憚りの、關の下紐また打解けし事のみ申しら／＼、めてたくも。

トお路讀むうち思ひ入れあり。此前より惣八、無理に大隅を連れて出て、わざと聞かすこなし。五郎吉も附いて出る。

彦三 サア、宛名は何と。

みち エ、。

彦三 讀まぬか。どうも讀めぬか。

みち 何の覚えもない事。

彦三 宛名を讀め。

みち 「お路様まるる。重三より。」

ト彦三、お路の轡元を取つて引附け

彦三 不義者め。何と覚えがあらうがな。

みち サア、どのやうにいはいはしやんしても、露ほどもわたしや、覚えはないわいなア。

彦三 斯ういふ状を取りかはしても、覚えないと野太いやつ。いつそ。

ト取つて突退け、轡を取上げ打たうとする。大隅つかくへ行つて、彦三を留め

大隅 倅、尤もぢや。尤もぢやが、マア、待つてくれ。

彦三 ヤア、親仁様。そんなら先刻からの

五郎 様子は残らず、お聞きなされました。

ト兩人も前へ出る。

惣八 お路様の不義の様子、家内は残らず、大方世間へバツと知れました。

彦三 サア、其名の出るが否さに

ト又キツとなるを

大隅 名が出て、大事な、おりやかまはぬ。倅、こんな事に氣を揉んで、必ず其方が病ひの重らぬやうにしてくれい。(ト無理にため、下に置き、お路を引起し、胸ぐら取つて) コレ、嫁女。日頃は倅大事、おれに孝行な其方が、どういふ心が入れ替つて、マアひよんな事をしてたもつたのう。トこなし。お路思ひ入れあつて、右の文を取上げ、悲しさに物もいはれぬこなしにて、大隅、彦三に、覚えはない」といふ事をいろくして見せ、大泣きにて

みち わたしや眞實、覚えはござんせぬわいなア。

と身を投げ臥して泣く。

彦三 覚えもないものが、其状が、どうして己が麻所に落ちてあつたぞ。

惣八 さやうでござります。こりや若旦那のおつしやる通り、お路さん、お前は恐れ入つたお方ぢやぞえ。斯ういふ大膽な不義をしながら、よう今まで人に知らさず、隣りの息子とどうして契つたものぢや知らぬ。ア、聞えた。大方あの塀を越したり、塀のひあひて猫がさかるやうに、忍び逢はしやつたでござりませう。道理で、最前、瓦の事で、隣りへ行つた時、重三が物いひ、お前がいやらしい目附きしたと思つたて。

トお路これにて惣八が胸ぐらとつて

みち エ、惣八。其方までがそんな事を。覚えはない。こちや知らぬ。知らぬわいのう。

ト惣八を振廻して、むこく叩く。

惣八 コレ。さう叩かれても、斯う露顯に及んだれば、此惣八はどうも執成しのしやうがござりませぬ。

ト五郎吉もこなしあつて、お路の側へ行つて

五郎 モシ、お路様。口ではつかりおつしやつては、若旦那も御得心はござりますまい。不義でないといふ、しつかりとした、いひ譯はござりませぬか。

惣八 何のあらう。不義に違ひないもの。

みち ハア。

ト又大泣き。向うバタ／＼にて、重三郎片手に状を持ち、金六が胸ぐらを取り、長兵衛も附いて出て来て

重三 此重三が身に覚えのない悪名。金輪際、雪がにやおかぬ。金六め、うせあがれ。

金六 でも、間男といふ慥かな證據は、其状ぢや。

長兵 若旦那。鬼瓦の評判の上に、間男と噂があつては、お前一分が立ちますまい。

重三 ぢやによつて、今黒木屋へ、此奴を引き摺つて行くのぢや。

長兵 早うござりませ。

ト三人本舞臺へ来て、重三郎、金六を内へ投込む。皆々悔り

五郎 こりや隣りの手代。

惣八 ほんに金六。そんなら、これも間男の

重三 オ、悪名抜かにやならぬ。

ト長兵衛も内へ入る。彦三こなしあつて

彦三 隣り同士といひ、友達の重三、此方から人やらうと思つたに、よう出て來やつたの。

重三 サア、ちつと來にやならぬ筋合ひて、手代の金六を同道。

ト此うち金六起上り、お路を見て

金六 間男の本尊。覺えなきや息子殿、ソレ。(トお路を突きやり)潔白を見せたく。

重三 オ、見せうと思つて來たのぢや。

大隅 そんなら、嫁の對手、隣りの重三も

長兵 金六が間男といひ出して、男の一分が立たぬと、重三様の腹立ち。お袋様のお嘆き、家内は亂騒ぎ。

重三 覺えもない事に、證據呼はりの此狀。長兵衛。爰の内へ讀んで聞かせ。

ト抱つてやる。長兵衛取つて

長兵 オツト、合點。(ト開き)一筆しめしり、今宵人目を忍び、彼の事を首尾ようなし下され候は

御嬉しく存じり、阿母様へ知れ申さぬやう、よろしく願ひ上げり、何事もおめもじの上、ま

づは此文ひそかに御覽、めてたくし。筒井重三様まゐる。路より。(ト讀むうち、皆々こなし。こ

りやこれ、内方の娘御の自筆。

金六 あ、いふ文を取りかはしたれば、知れた間男。それでは筒井の家に疵が附くゆゑ、此金六が差圖

て、お袋様には表向き、勘當とほりり出させ、内證で少々の貢ぎをやる相談したれど、あの息子

殿がちやくばつて、おれを爰へ連れて來て

長兵 身の潔白を立てる若旦那。

惣入 そんなら、此方も此狀を

ト此方の狀をひろげ、重三郎に見せる。口の中にて讀み

重三 「お路様まゐる。重三より。」

ト名宛てばかり讀む。彦三も長兵衛が讀んだ狀を引つたり、これも口の中にて讀み

彦三 「筒井重三様まゐる。路より。」

ト名宛てばかり讀む。大隅こなしあつて

大隅 兩方合せば、いよく不義と嫁女の身の上。

トお路きつと思ひ入れあつて

みち オ、さうぢや。いひ譯がござりますわいなア。

大彦 ナニ、いひ譯とは。

みち コレ、惣八。(ト惣八を此方へ連れて來て)ソレ、最前隣りへ、瓦の事を頼みに行て、戻つて來た其後、

其方が言やるには、隣りのお袋様の固意地で、是非とも瓦をおろして下さらねば、重三様を頼んでおいた。阿母様に隠して、ひそかに鬼瓦をおろしてもらふ筈ぢやほどに、お前も其頼み状をやれと、其方がわしへ仰せ事に書かした、コレ、此文ぢやぞや。(ト文を見せ)それが重三様と、不義の證據になつた此場の仕儀。様子知つたは其方なれば、此文は瓦の事と、ちやつといひ譯してたも。いひ譯してたも。

惣八 ア、モシ、お路様。此惣八が、お前にさういふ文を、書かした覚えはござりませぬぞえ。

みち イ、エイナウ、それでも文言を、其方のいやつた通りに

惣八 イエ、知りませぬ。何の、瓦の事は、最前連れ立つて行て聞き入れないゆゑ、それなりてござります。

みち でも、見すくわしに書かして、今更其やうに

重三 お路、それではいひ譯になるまい。

みち アレ、それでも惣八が。

惣八 おりや知らぬものを。

金六 此方は知れた息子殿。

ト重三郎が胸ぐら取るを

重三 何するのぢや。(ト振り離す)

金六 イヤ、なんぼこなさんが、劍術を知らつしやるといふても、いはにやならぬ。明りを立てうと己を爰へ引ツ張つて来たが、明りが立たぬ。矢ツ張り暗がりの忍び逢ひ、證據は二通の此状。

重三 イヤ、己が書いた覚えがなければ、似せ筆ぢや。

金六 そんなら似せ筆といふ、随かな證據があるか。

重三 サア、それは。

惣八 お路様。いよ、お前も

金六 不義者、間男。

重路 サア、

惣金 サア、いつそ。

ト惣八はお路、金六は重三郎にかゝる。ト奥より半兵衛つかくと出て、兩人を引廻し、兩方へ取つて投げる。

大隅 ヤア、番頭の半兵衛。

彦三 コレ、聞きやつたか、お路が身の上。

半兵 サア、ようござります。お路様の明りは、私しが立てます。

みち そんなら、どうぞ、半兵衛殿。

長兵 次手に此方の若旦那の

半兵 ハテ、此方が解れば、お前の方もさつぱりと

重三 曇り無き身の、晴れるやうに、

半兵 マア、及ばずながら、やつて見ませうかい。

ト下に居る。金六、惣八起き上り

惣八 こりや思ひがけない半兵衛殿。

金六 コレサ、投げられた事はあとへ廻して、此方の息子と愛の縁御、不義間男と極まつてあるを、懺
りを戻してこなさんが

半兵 サア、そこが番頭ぢや。

二人 ヤア。

半兵 此黒木屋の内を取裁く、へ、番頭の半兵衛。隣り同士の不義間男、名さがだつては兩家の恥ぢ

やによつて、蛇の目を灰汁で洗つたやうに、コレ、番頭の役に、譯を立て、見せうと思つて。

金六 面白い。武家ならば重ねて置いて四つ。そこを町人だけ、半兵衛殿の取扱ひは、大方二人を投り出
す思案か。

半兵 オ、投り出す。二人ながら面恥か、せて、洛中洛外にもたゝずみの出来ぬやうに、此半兵衛が
して見せう。

金六 さうありさうなものぢや。ソレ、惣八。

惣八 合點ぢや。

ト立ちかゝるを、半兵衛又兩人を支へて

半兵 こりや何するのぢや。

金六 ハテ、投り出せとあるゆゑ、此方の息子を

惣八 相手のお路を

半兵 イヤ、投り出すは、あの二人ではない。

惣八 そんなら、どの二人を。

半兵 金六。惣八。汝等二人を投り出すのぢや。

惣金 ヤ、何と。

半兵 コリヤ。不義の證據の、一通の狀より、人はそれぞと、白紙の此手紙。

ト最前の返事を出す。

金六 ヤア、そりや慥かに

ト取りにかゝるを殿り倒し

半兵 ソレ、讀んで見た。

ト長兵衛へ投つてやる。長兵衛取上げるを

金六 それ讀まれては

ト取りにかゝるを、五郎吉立廻つて留める。長兵衛狀を見て、合點のゆかぬこなしにて

長兵 「先き程、嫁のお路が鬼瓦の文を、色事の文の作意、どうもくあつばれと感心致し候、然らば此方息子重三郎に、右の文を見せ、大山をあげ申すべく候、先達て渡し置きし似せ筆の狀にて、彦三に腹を立てさせ、其方家内を騒動させる事肝要に御座候、委細は兼ねて牒し合せし通り、御取計らひ下されたく、まづは御返事までに如此御座候。」(ト讀みしまひ)コレ、此、薄赤う書いた文字は。

半兵 酒で書いて、火であぶれば、其如く現はれる文字。二人が企みて、堀越しに通はす魂膽。

惣八 ヤアく。そんならそれは、金六が、おれがところへ寄越した返事か。

ト取りに行くを、半兵衛兩人を引廻し

半兵 宛名は無けれど、それがらりと様子は知れた。汝等が企みてお二人に、不義の悪名附け、いひ合せて兩家を吞まうとは、太い奴等の。

金六 それ見られたら、

惣八 半兵衛汝を

ト又半兵衛にかゝるを、五郎吉、長兵衛押し隔て、立廻りよきところにて、重三郎、金六を蹴倒し、二人を背中合せてケルく巻きに縛る。二人此形にて起き上り

惣金 これは。

重三 半兵衛殿。お差圖の通り、斯うして二人を投げ出せば

大隅 成程。浪風立たず、事の納まり。

半兵 重三様の思ひ付き、出来ました。

惣八 何を。折角うまくやりかけた處へ

金六 半兵衛、汝をマア

トくるりと廻つて

惣八 どうしてくれう。

ト又くるりと廻つて

金六 エ、いまくしい。

ト顔ばかりにてこなしあつて、兩人足投出して下に居るところへ、向うより羽織、袴の町代一人走り出て来て

町代 モシく、彦三様ひこさうさま。お宿にござりますか。會所へお代官様がござつて、何やら尋ねたい事がある。

火急にお前を呼んで来いとどのいひつけ。サアく、只今ござりませ。

ト彦三ハツと思ひ入れ。

大隅 そんなら、會所へ、代官殿が来て、彦三に

皆々 急に来いとは

彦三 大方そりや、河原の

トいはうとする。半兵衛ちやつと

半兵 イヤサ、河原の、サア、瓦の事で、あなたは御病氣と知れてあれば、こりや若旦那の名代に、私

しが會所へ參つて、何かの様子を、聞いて參りませう。

彦三 そんなら、半兵衛、其方が

半兵 ハテ、何もお案じなさる事はござりませぬ。親旦那。お路様。若旦那に、お氣をお附けなされませ。

町代 彦三様の代りに、半兵衛様なら大丈夫。サア、ござりませ。

半兵 五郎吉。ついでに此二人を、河原へ連れて行て、追ッ拂へ。

五郎 そりやわしが望むところぢや。(ト薪さつばを持って) サア、二人ともに、立ちをらう。

ト舞臺を叩く。兩人恠りして、立上り

金惣 エ、仰山な。恠りするわい。

町代 サア、半兵衛様。

半兵 さやうなれば皆様、行て參ります。

ト合ひ方になり、五郎吉兩人を追ひ立てる。半兵衛、町代を連れ花道へ行く。惣八、金六一足づゝくる廻りく、半ばまで行つて

ト心々に思ひ入れ。此時重三郎は最前より手を組み、俯向いて居る。此時、長兵衛、取散らしてある状を拾ひ集め

長兵 穢らはしい此似せ筆。お路様の文も一所に、かうくく。トずんく引裂き、片脇へ捨て、まだ残つてある、酒で書いた此手紙。思へばこれで、さらりと事が解つた。これを思や、掛け物にせうか知らぬ。イヤ、彼奴等が書いたのを、何の掛け物。ナア、大隅様、大方此手紙も、あの高塀から投げ込んだのであらう。

ト上の方を見て、此時棟瓦に心附き

めんような。内方の棟瓦は、いつの間に

大隅 イヤ、最前取り替へたは、悴が病氣本復の爲に。

トこれにて彦三、お路も家根の上を見て

彦三 ほんに、あれは鍾馗。

大隅 半兵衛が計らひに、何事も家の爲。彦三が爲を思つて。

長兵 ハ、ア、聞えた。これで鍾馗半兵衛。どうやら男達のやうな。ハ、ハ、ハ、ハ。ト重三郎を見てコレ、此方の若旦那。お前は最前から何もいはずに、俯向いてばかりござりますが、どうぞさつし

やりましたか。申し、内方の棟瓦が取替りまして、鍾馗になつたを、アレ、御覽じませ。

ト何心なしに勤める。此時重三郎ぢつと顔を上げ

重三 何ぢや。鍾馗ぢや。(ト上の家根を見る)。

長兵 ソレ、鍾馗の瓦。(ト指さしする)。

重三 ほんに、鍾馗が。

ト立上り、飛退き、恐れ、慄へ出す。皆々恟り。

大彦 ヤア、重三殿は。

長兵 若旦那。何とさつしやりました。

ト重三郎取りのぼせ、狂人のこなし。

重三 サアくく、堪らぬく。アレく。ソレく。鍾馗の瓦が睨み附けて居る。さしづめ己は鬼であらう。鬼は外、福は内へ行て母者人に、終を振舞はうか。

ト駆け出すを、長兵衛留める。振り切る。立廻りあつて、長兵衛向うへ廻り

長兵 コレ、若旦那。こりや何ぢや。お前は氣が違つたか。どうして狂人にならしやつたぞ。

重三 氣が違つたとは、梅か。櫻か。何でも爰には居られぬ。鍾馗は怖い。そこ退けやい。

長兵 コレ、若旦那。お前氣がのぼつたら、氣を鎮めてとつくりと

重三 イヤ〜。鎮めては居られぬ。怖い〜。

長兵 それでも。

重三 鬼は外。福は内〜。

ト長兵衛を引退け、狂ひ〜て向うへ走り入る。

大隅 アレ、思ひがけない、重三が狂氣。

みち 長兵衛殿。重三様の様子を、早うお袋様へ。

長兵 さうぢや。お知らせ申しませう。

ト長兵衛こなしあつて向うへ入る。

彦三 鍾馗の瓦て隣りの重三が、氣違ひになつたも

大隅 鬼に勝つは鍾馗。忤、其方は本腹。

みち さぞやお袋様が

大隅 ハテ、隣りの事はかまはずと、兎角大事は此方の彦三。

彦三 それほどまでに……思へば不孝な私しを。(ト愁ひの思ひ入れ)。

大隅 アレ、嫁女。忤はきつう鬱いて居るさうな。奥へ連れて行て、好きな酒でも勤めや。

みち アイ〜。そんなら、申し、彦三様。父様の仰せ、サア、奥へ行て、仲直りの盃を、ナア。

ト手を取るを

彦三 コレ、見苦しい。

ト振り切る。大隅思ひ入れあつて

大隅 ア、春南の加減やら、目もかすみ、耳も聞えぬ。

みち アレ、あのやうに……親御のお氣休めに。

彦三 そんなら奥へ。

ト立上る。大隅此うち門を覗いて

大隅 ア、降らねばよいが。

ト唄になり、彦三こなしあつて、お路を連れ、奥へ入る。跡に大隅残り、以前の鉢植みを取つて來て

大隅 こりや最前、隣りから贈つた、病氣見舞ひの觀音草。此方の息子は本腹する、隣りの重三は狂氣になつたが、これを又此方から、お袋へ送つてやらうかしらぬ。

ト唄になり、鉢植みを前に置き、ぢつと眺めて居る。此うち始終合ひ方にて、向うより重三母お高出て

来て
御免なされませ。

トブツと内へ入る。大隅見て

大隅 オ、これは隣りのお高殿。何と申うて、サ、これへく。

大隅 イヤ、おかまひ下されますな。私しが参りましたは、大隅様、お前にちとお頼みがあつて。(ト側にある鉢植を見ても)こりや最前、病氣見舞ひに、贈つた鉢植え。

大隅 サア、此觀音草の心が解けぬゆゑ、今に眺めて居ますわいの。

大隅 アノ、其心が解けぬゆゑ、……それで、(ト上の方の家根を見やり、鍾馗の瓦を見て)ハテナア。

ト思ひ入れ。下に居る。

大隅 時に、お高殿。こなさんの頼みとは。

大隅 外の事でもござんせぬ。見れば、あの家根の棟瓦、お取替へなされた鍾馗を、おろしてほしさに、
それでわざく、此高が、直きのお頼み。

大隅 ナニ、あの瓦を。

大隅 ナイ。掛けがへのない、たつた一人の大事の息子、最前までも、何の事も無かつたに、取替はつ

た鍾馗の瓦を見て、俄かに亂心。わしが悔り。家内の騒動。親の悲しさ推量して、今までさへ其儘にあつた瓦、取替へるに仔細はござんすまい。わりない御無心なれど、どうぞ鍾馗をおろして下さんせ。お頼み申しあげます、大隅様。

大隅 イヤ、そりや成りませぬ。

大隅 エ、。

大隅 コレ。わが身抓つて人の痛さを知れと、此方の彦三の病氣は鬼瓦ゆゑ、それでこなさんにだんだん頼んで、おろして下されと、嫁まで最前やつたのに、聞き入れなく、それで是非なう、番頭の半兵衛が思ひ附きて、鬼に勝つは鍾馗ぢやと、取替へて上げた棟瓦。それをおろしてくれいと頼みに來るとは、いかに女子ぢやというて、お高殿、さう自由にはなりませんぞ。

大隅 サア、其辨への無いも子の可愛さ。是非取つて下さんせぬと、此方の重三はいつまでも、亂心であの通り。

大隅 イヤ、鍾馗をおろせば、此方の息子彦三が、又鬼瓦を見て煩ひます。

大隅 其彦三殿はお前の息子、たとへ煩はうが、死なつしやらうが、わたしやかまひはせぬわいなア。

大隅 己もこなたの息子の重三が、煩はうが、死なうが、何のかまひはござらぬわいの。

たか そりやあんまり無得心といふもの。

大隅 無得心でも、邪慳でも、これまで頼んだ鬼瓦を、おろさぬこなたへの返報がへし。金輪際、鍾馗の瓦、おろす事はなりません。

たか どうあつてもおろしてもらはにやなりません。

大隅 ハテ、おろす事はならぬ。

たか イヤ、是非ともわたしが頼み。

大隅 頼みは聞かぬ。

たか そりやお前

大隅 イヤ、こなたが

ト兩人舞臺を叩き、角目立ちて立ちあがる。此前よりお路、奥より出かけ聞いて居て、兩人が仲へ入り
みち マア、お二人ながら、お待ちなされて下さりませ。

大隅 イヤ、嫁女、かまやんな。

たか お路殿、退かしやんせ。わたしもいひが、りなれば、

みち ハテマア、其やうにお腹をお立ちなされずと、お互ひにとつくりと、御相談つくて瓦の事を、ナ

ア。

たか ムウ。相談つくなら大隅殿、もとくへ、取替へませう。

大隅 取替へるとは、鬼瓦と鍾馗の瓦と、入れ替へるのか。

たか イ、エ、彦三と重三を

大隅 ヤア、何と。

たか 此お路殿もわしが嫁。(トお路を引廻し、入れ替つて)彦三を此方へ、返して下さんせ。

ト合ひ方。

みち エ、そりやマア、何の事でござんすえ。

たか 成程。お前も合點がゆくまい。もと、こゝな彦三殿は、死別れた重右衛門殿と、二人が仲に出来た、眞實の子ぢやわいの。

みち アノ、彦三さんが……それに又、お前のお子の、重三さんはえ。

たか あの、大隅殿と眞實の親子。互ひに隣り同士の子を取替へたは、生れた時は兩方厄年、二つ子。内て育て、は親に崇るといふゆゑ、捨てる代りに互ひの相談も、懇ろな仲、得心づくて此方の息子は、此家の彦三。又、此方の跡取りの重三といふは、大隅殿の忤に、違ひはないわいの。

みち ハテ、思ひがけもない。そんなら彦三さんと重三さんとは、取替へた子でござんしたかいなア。
ト此うち大隅黙つて居て

大隅 たとへ取替へ子でも、養ひ子でも、これまで眞實のわが子と思ひ、育てあげた彦三、今更なんの返されうぞ。エ、流石は女子。何でもない瓦の事から言ひ上がり、人も知らぬ息子の身の上、よう打明けていやつたの。もし彦三が聞いたら、水臭う思はうかと案じて居る。嫁女、必ずとも此事を

たか イ、ヤ、いはねばなりません。

大隅 アレ、矢ッ張り固意地に

たか コレ、是非とも彦三を取返さうと思へばこそ、最前贈つた観音草。

みち そんなら、此鉢植ゑの

大隅 観音草を、どいどうして贈つたのぢや。

たか それは、

ト思ひ入れあつて、あたりを窺ひ、門の戸びつしやりと閉すと、合ひ方になり、元の處へ来て、こなしあ
る。此うち一間の障子を明け、彦三様子を立聞きして居る。お高、序幕の頭巾を出し

たか これ見知つてか。

ト真中に立つて居る。大隅、お路、左右より、下に居て、手を掛け

大隅 こりや倅彦三が、頭巾でないか。

みち 執菊と菊蝶は、慥かに小吟さんとの比翼紋。

二人 これがどうして。

トお高小聲にて

たか 彦三は、人殺しぢやわいのう。

ト泪ぐんで下に居る。兩人もエ、と恠り

サア、もう先月二十五日。智恩院の御忌参り。下向には日は暮れる。供の久三に提灯持たせ、と
ぼく、歸る四條河原、摺れ違うたは慥かに彦三。ハテ合點のゆかぬ素振り、思ふあとに、人が
殺してあつたわいのう。殺されたは慥かに醫者、死骸の側に落ちてあつたは、此頭巾。人手に渡
さぬが幸ひと、持つて戻つて今までも、隠しても隠されぬ、四條河原の人殺しの取沙汰にも、彦
三が仕業と知れた上は、召捕られて牢へ入り、解死人は知れた事。彼奴が身はかまはねど、其時
は、コレ、ヘト大隅に取附き、案の上から養育の、大恩受けた大隅殿、お前の難儀。不孝の上に不孝を

重ね、せめてはそれと知れぬうち、もとくしに取戻せば、まさかの時の難儀をば。實の此母の身は、どのやうになつてもかまはぬ、不孝で黒木屋の家へ疵が附けともなさ。殊に、此頃病氣といふも、鬼瓦を怖がるは、死んだ夫が不孝な奴と、草葉の蔭から思うてござる憎しみが、自然と瓦に乗り移り、それで恐る、彦三が煩ひ。だんくの頼みでも、わざとおろさぬ、わたしが心も鬼瓦。いつそ重つて死んだらば、刃の錆になるまいと、朝夕の看經も、持佛に向うて、たゞ彦三が、早う死ぬるを、願うてばかり居ますわいの。

トこなし。お路も思ひ入れあつて

みち そんなら、申し、此鉢植ゑの観音草も、彦三様のお身の上。

たか 秋は蒼落ちて花咲く観音草。早う死ねといふ心の謎々。

大隅 ムウ。そんなら、最前會所から呼びに来て、半兵衛が行たも、さては人殺しの、(トふと障子屋體を見る。彦三怖り、閉す。こなしあつて)エ、是非に及ばぬ。(ト手を組み、思案する)。

たか サア、それぢやによつて、重三と彦三を、どうぞもとくしへ。

大隅 イヤ、猶成りませぬ。たとへ彦三が人殺し、此親に難儀がかゝらうが、さらくいとほぬ。忤が獄門ならば同じ板。磔刑なれば並んで突かれる。

たか そんなら、どうでも。

大隅 眞實の子の重三めはかまはぬ。おりや矢ッ張り彦三が不便なわい。ナウ、嫁女。

みち サア、申し、返せとあるお袋様も産みの義理。返さぬといふお前様も、生さぬ仲の義理。其義理義理に搦まれて、彦三様は人殺しの科人と、聞いて悲しさやる方なさ。わたしや何とせうぞいなア。

ト泣き落す。お高大隅もこなしある。障子屋體より彦三、しほくとして出て来る。

大隅 ヤア、其方や彦三。

たか そんなら、此様子を

彦三 あれにて残らず、承りました。

兩人 ヤア。

彦三 まづ〜。

ト大隅が手を取つて上座へ直し、又お高を無理に勤めて、大隅が次ぎへ直し、遙か下つて

これまでは知らぬ事として、義理ある親に、産みの母。不孝の段々、眞牛お免しなされて下さりませ。(トお路に向ひ)お路とても、これまでの淺からぬ志し。忤い。(ト正面へ居直り)斯うなる上は、

隠すに及ばぬ。成程、五日あつと、二十五日の夜、四條河原で増田有宅といふ醫者を殺したのは、私してござります。

三人 そんなら、いよく。(とこなし)。

彦三 サア、それもお出入りの梅園家より、仰せつけられし、彼の若菜の硯を買ひ求め、早う御殿へと
思ふところに、醫者の有宅無理に引留め、祇園の二軒茶屋にて酒を勤め、酔ひ伏さして硯を横取
り、大切なる御用なれば、段々頼めど返さぬ上に、却つて私を殺さうと、閃かす脇差しも、薄暗
がりの四條河原。其脇差しをやうくと、引つたくりしが、斬るとも思はず、つい一かせに身をも
がき、我れと我が手に有宅が、刃にか、つて死んだのは、此身の因果。せめて硯と死骸を探せど、
どつした事やら、硯は無く、南無三、實と思ふところに、提灯の灯影に顔を隠したが、(トお高な
見て、こなしあつて) 思ひがけない實の母。……それより未練に立歸りしは、彼の硯を吟味と思
へど、心が咎めて世間を憚り、家にはばかり居るうちに、縁先からふツと見附けたあの鬼瓦。
これ幸ひと作り病ひをして、寧ろ名乗つて出ようかと、駈け出しては、却つて親仁様のお慈悲、
お路が介抱、敷居一寸出られねば、是非なく今日まで存へて居る、彦三が身の上。頼みに思ふ半
兵衛に、事の様子を打明けて、是非名乗つて出る覺悟。お路。此様子を半兵衛に、とくと、親仁

様の事、硯の事、頼むと傳へてくれ。お二人様、おさらば。

ト立上り、駈け出さうとするを

みち 待つた。そんなら、お前は

彦三 名乗つて出ねば、あの親達に御難儀が。

みち ぢやというて。

彦三 離せ、お路。

大隅 待て、忤。

彦三 お退きなされ。

ト皆々立廻りにて、お高もよろしく留めて

たが 待つてくれ、コリヤ、彦三。

彦三 観音草の謎の解けた私し、なぜお留めなされます。

たが ハテ、覺悟極めた其心なら、母がたつた一言。

彦三 エ。

たが コリヤ。(ト無理に引据ゑ、彦三の顔を見て) これまで其方が身の安否は、棟を隔て、隣り同士、毎

日聞いて、泣いたり、笑うたり、産み落してから、たつた二月ふたつき側に居て、二十四年が今日まで、
人手に掛けて他人向き。實うみの母のせつない恩愛。口で憎めど矢ッ張り可愛い。死ねと勤める此わ
しに、名残りの顔をとつくりと、(ト引寄せ)コレ、見せてたもいのう。

大隅 同じ思ひの嘆きは一つ。

みち 二人の親御に

彦三 死なねばどうも、いひ譯がござりませぬわいのう。

ト四人思ひ入れ、こなしあつて大泣き。向うバツ／＼にて、五郎吉走り出る。惣八あとより頼冠りにて、
ソツと附いて出て、橋が／＼に忍ぶ。五郎吉内へ入り

五郎 もうしく、先刻半兵衛殿が會所へござつたのは、彦三様が常々懇ろに連れて歩かつしやつた、醫
者の宥宅が殺されたゆゑ、もしやと疑ひのお尋ね。それを半兵衛殿がいろ／＼と、いひ譯の最
中。

大隅 そんならまだ人殺しは、彦三とも治定ちぢやうせぬか。ヤレ、嬉しや。

ト此うち惣八、橋が／＼の植込込みを傳ひ、屋根へ忍び込む。

みち 必ず、彦三様、名乗つて出る事は、マア、止めにして下さりませ。

彦三 ぢやとて、どうて通れぬ天の網。

五郎 ハテ、日頃如才のない半兵衛様、いひ譯が濟んで、歸つて見えませう。

たが 思ひ廻せば半兵衛殿が、人殺しの噂をくろめん爲、彦三が病氣を世間へ知らず。さては

ト上の方の屋根を見る時、惣八、上の方へ廻り居て、鐘櫃の瓦をこぢ離して居る。お高、五郎吉へこな
しあつて

あの鐘櫃の瓦。

五郎 ほんに、彼奴は

ト側にある鉢植盆を取つて、家根へ打ちつける。惣八悔り。最前の金バツ／＼と亂れて落ちる。

皆々 ヤア、此金は。

ト大隅取上げ

大隅 こりや佐市様より受取つた三百兩。

惣八 それを。

ト飛下りてかゝるを、彦三下へ引廻し、すぐに五郎吉と立廻り

みち 又惣八が戻つて来たは

五郎 最前の三百兩、此奴が盗んで、隠し處はあの瓦の下。これを取りに歸つたナ。
惣八 何を汝が。

ト立廻りにて、五郎吉、惣八を押へるうち、上の板辨を蹴破り、金六、長兵衛立廻りながら出てくる。
大隅 ヤア、金六も舞ひ戻つたか。

長兵 兎角重三様を拒む、此奴等が悪事。

金六 皆投り出して筒井の家は己がしてやる。

ト始終立廻りのうち、蹴破りし處より重三郎出て、よき處にて金六を取つて投げる。長兵衛押へる。

たか ヤア、重三。其方が病氣は。

重三 思ひ廻せば、最前金六が服ませし藥、一時ほどは亂心する、無下有とやらいふ藥種の業。

彦三 そんなら、此場の様子も

重三 残らず聞いた。

惣八 人殺し。

ト刎れ返して立廻り

彦三 名乗つて出れば

たか コレ。(ト留める)。

重三 育てられたる恩送りに、此重三が

大隅 出かした悴……てはない、重三郎。

彦重 是非とも。

ト駆け出す兩人を、お路、お高兩人して引留め

高路 必ずともに

ト長兵衛、五郎吉は金六、惣八を取つて投げる。

大隅 親の心を

彦重 ても

トおこつくな

たか 子知らずぢやなア。

ト引き据える。よろしく

幕

大 切 半 兵 衛 内 の 場
道 行 の 場

浄比翼鳥邊山 常磐津連中

登場人物

黒木屋彦三、黒木屋番頭、半兵衛、千鳥濱右衛門、髪結ひ、松の尾新兵衛、坊主の
小兵衛、彦三女房、お路、井筒屋小吟、半兵衛女房、おりく、桂佐市、井筒屋徳兵衛、山伏、
奇妙院、仲居、お富、小和田屋又助、牛飼ひ、五郎吉。

造り物、二重舞臺、見附け風壁。納戸口。上の方に建て附けの押入れ。臍病口に中二階。いつもの處に
門口。橋がかり竹格子よろしく、幕の内より半兵衛を、凛々しき捕り手五人にて取り巻いて居る。上手
に濱右衛門、柿の鉢巻き、黒股引、代官にて下知して居る。門口の外におりく、女房の形にて内の様子
を窺うて居る。此見得、マタ／＼にて暮明く。

濱右 ソレ、半兵衛を、踏み附けて、繩ぶて。

捕手 ハッ。腕廻せ。

ト、いゝるを、半兵衛ちよつと立廻つて、皆々を投げのける。

濱右 こりや手向ひか。

捕手 やらぬ。

トきつと取り巻くを

半兵 イヤ、手向ひは致しませぬ。事の様子もいはず、此半兵衛をやらぬ、遁さぬとは、何故てござり
まするな。

濱右 何故とは慮外な奴の。コリヤ、其方は黒木屋彦三が家來なれば。

半兵 成程。黒木屋は私しが親方なれども、女房もろとも、此糺の森に別家致して居りますが、何とぞ致
しましたかな。

濱右 イヤ、黒木屋彦三が深いひかはした、祇園町の女郎小吟、夜前から駈落ち致したわやい。

半兵 ヘイ。女郎の小吟が駈落ち致せば、なぜ私しに繩かゝれと

濱右 さればサ。小吟が相方彦三儀も、三日以前家出して行方知れぬといふ事。それに又ぞろや小吟も
親方の内を駈落ち。察するところ、此兩人を、其方が隠まひおくに違ひはない。それゆゑ身共が
繩ぶつて詮議するのだ。

半兵 アノ私しを。

濱右 いかにも。速かに小吟を出して、身共に渡せばよし、異議に及ぶと、其方に繩打ち、ひらつ火水の拷問。

捕手 但し小吟を出すか。

濱右 繩ぶたうか。

半兵 サア、

濱右 サア、

捕手 サア／＼／＼、

濱右 半兵衛返事は、何と。

半兵 イヤ、覺えの無い小吟が駈落ち。殊に、隠まひしなどは猶知らぬ事。よし駈落ちした小吟を隠まはうとも、祇園町の親方や、せげんが吟味に来さうなところを、(ト捕り手を見廻し、濱右衛門をキツと見て)立派な捕手といひ、テモ仰山なお代官様。

ト此時門口より

りく 其筈でござんす。ありや小吟さんに惚れて居る、濱右衛門とやらいふ侍ひぢやわいなア。

トいひ／＼内へ入る。濱右衛門ギツク思ひ入れ。

半兵 ムウ。そんなら女房、其方がとつくりと

りく アイ、よう知つて居るわいなア。

濱右 ヤイ／＼、女。何をいふ。身共は處の代官。それを濱右衛門とは。

りく 知らいてかいなア。兄様の話しに聞いた、祇園てのもや／＼。かう／＼いふ侍ひぢやと、よう聞いて知つて居るわいなア。

濱右 そんならわりや、其時の、髪結ひの妹か。

りく それほど身に覺えがありながら、代官とはえ。

濱右 ヤア。(トぎよつとする)

りく ても、あざとい、お侍ひてはあるわいなア。

濱右 南無三。しくじつた。

半兵 道理で、初めから合點のゆかぬ、捕り手に代官。捕つたく／＼と込み入つたは、こりや彦三様のお身の上と……サア、思ひの外に小吟殿の、駈落ちの詮義。(ト濱右衛門を見て)エ、聞えた。今まで口説いても聞き入れぬ小吟殿の駈落ちを幸ひ、おれが隠まうて居るかと嚇しかけて、引上げようといふ仕事であらうが、さううまきは、滅多に乗らぬてや。

りく こちの人、あのマア、阿呆らしい顔を見やしやんせ。

濱右 ヤイ／＼。其やうに武士を嘲弄致すな。身共も言ひが、り、代官てゆかずば、元の濱右衛門て、此家を家探し。ソレ、皆の者。

捕手 合點ぢや。

ト奥へ駆け込まうとするを、半兵衛一々引戻し、濱右衛門が腕を捻ぢ上げる。

濱右 アイタ、／＼、／＼。こりや、どうする／＼。

半兵 覚えもない事に家探しと、家内を荒す盡がندوق。殊に、似せ代官の化けの皮、ほんまの代官所へ連れて行て、引ッ剥がうか。

濱右 イヤサ、それは

半兵 捕手の奴等も、大方雇ひ人。此奴も一所に引ッ縛つて

ト濱右衛門を取つて投げる。此拍子に捕り手皆々門口へ逃げて出て

捕手 モシ／＼、濱右衛門様。ちやつとござりませ。

ト濱右衛門投げられながら

濱右 いかにも、一所に行かねばならぬ此場の仕儀。いふ程の事跡の噂。エ、わるい處へ女房が歸つて来て

りく 何としたえ。

濱右 ハテ、目角の強い女ぢやなア。

半兵 コリヤ／＼。きり／＼行かぬと、代官所へ

濱右 イヤ、それには及ばぬ。

ト門口へ逃げて出る。

捕手 折角小吟を

濱右 はて、かまはずと、雇ひ人参れ。

ト合ひ方になり、濱右衛門皆々向うへ逃げて入る。おりく、半兵衛と顔見合せ

半兵 ハ、／＼、／＼。何と馬鹿な奴等ではないか。

りく サア、彼奴と知らず、わたしも歸りか、つて、内の様子を聞いて、悔りしたわいなア。

半兵 さうしておりく、其方や最前からどこへ行た。

りく アイ、河東へ兄様を、呼びにやる人頼みに。

半兵 新兵衛様に、何ぞ用があるか。

りく アイ、大事の（ト思ひ入れあつて）イヤ、大事の母さんの年忌が来るによつて、それで兄さんを

半兵 呼びにやるとは。……はてなア。(ト)こなしあつて。時に、女房ども。今馬鹿者がいうた、昨夜か

ら小吟殿が、祇園町を駈落ちしたとあるが、もしやおれが留守の間まにても、其方が

りく アイ、彦三様ひこさうざうにいひかはしてござる小吟様は、お前が以前のお主しゆの娘御と、いつぞや名乗り合

てから、大事にさしやんすお方ゆゑ、あの二階に

半兵 そんなら幸ひ。彦三様と一所に

りく サア、それもお前に尋ねてからと、わざと別に忍ばしておきましたわいなア。

半兵 思ひ合つてござる仲、遠慮には及ばぬ。

りく そんなら其様子を

半兵 奥とつくりと

りく こちの人。

半兵 女房ども。おぢや。

ト唄になり、半兵衛、おりくを連れ、奥へ入る。向うより濱右衛門引返し、小兵衛と連れ立ち出て来て、

花道にて

濱右 コレサ、小兵衛。折角小吟を引上げようと、代官になつてゆすりかけたが、とゞ／＼しくじつた。

小兵 どうでこなさんではゆかぬ。これからはおれが直ちきに、此方の仕事を

濱右 すりや彼の若菜の硯を

小兵 コレ。(ト袋入の硯を出し) 四條河原で骨を折つて、せしめておいた此硯。いつでも金になる大事の代物しろものなれど、こなさんに預けておく。滅多に人に感づかれぬやうに、合點か。

ト右の硯を濱右衛門に渡す。濱右衛門取つて

濱右 成程。大金になる此硯。身共が慥かに預つて居ようが、シテ又、其方が今日の仕事は。

小兵 矢ッ張り若菜の硯ぢや。(ト同じやうな硯を出して見せ) それを型かたにして、嵯峨の硯屋で彫らせた似せ物。

濱右 そんなら、それで

小兵 細工は流々。仕上げてから逢ふほどに、こなさんはいつもの處に

濱右 待つて居ようが。小兵衛。

小兵 濱右衛門様。マア、ござれ。

濱右 合點だ。

ト合ひ方になり、濱右衛門、硯を持って向うへ入る。小兵衛こなしあつて、本舞臺へ来て

小兵 黒木屋の番頭半兵衛とは爰ぢやの。

ト奥より

りく アイ／＼。どなたでござんす。(トおりく出て、小兵衛を見て) お前はつひぞ

小兵 逢はぬ筈ぢや。おりや坊主小兵衛といふ者。

りく エ。そんなら兄さんの話し、いつぞや祇園で

小兵 ヤ。

りく マア、それは格別。其小兵衛さんがわたしの處へ

小兵 尋ねて来たは半兵衛に、ちつと逢はねばならぬ用があつて

ト奥より半兵衛出かけ居て

中兵 坊主小兵衛とやらが、此半兵衛に用があるとは。(ト前へ出る)

小兵 ムウ。すりや貴様が黒木屋の番頭。

半兵 ムウ。つひに逢はぬこなた。

りく コレ、こちらの人。あの人は、ソレ、わたしがいうた

半兵 ハテマア、様子を聞いた上の事。

トこなしある。

小兵 其様子、とつくりというて聞かさう。マア、お内儀、貴益貸してもらはう。

ト下に居る。半兵衛、おりく心意氣ある。向うより佐市、袴、羽織にて、家來連れて出て

佐市 大方此家であらう。

家來 さやうでござります。辻番でとくと承りました。

佐市 相違はあるまい。(トつつと内へ入り、半兵衛を見て) 半兵衛。在宿か。

半兵 これは／＼、佐市様には、見苦しい私しが宅へ、ようお入り下されました。まづ／＼。

ト佐市は上へ、半兵衛、おりくは下手に居る。

りく もうし、こちらの人。佐市様とおつしやるは、其梅園家の

半兵 成程。若菜の硯をお取りに、お越しなされたのでござりませうな。

佐市 いかにも。黒木屋に於て其方が願ひの日延べも、早今日の日限りなれば、受合ひし半兵衛、いよ

いよ若菜の硯を

半兵 サア、差上げねば、親方彦三の身の上。其お咎めは親大隅へも、かゝりや繋がる命づく。一旦受合
つた上は、是非とも今日中に、差上げねばなりません。

りく こちらの人。其硯が今に在り所が知れぬと、夜もろくに寐ずに、屈托して居やしやんすお前、それを今日中に差上げませうとは。

佐市 ムウ。すりやまだ、硯の在り所が知れぬか。

半兵 イヤ、たとへ知れても知れいても、今日中に吟味致して、私しが甲が舍利になつても差上げます。りく それでもお前

半兵 ハテ、女さかしい。控へて居い。

トこなし。おりく思ひ入れある。此うち小兵衛葺のんて居て、此時

小兵 半兵衛、氣遣ひせまい。貴様の尋ねて居る若菜の硯の在り所は、知れてある。

半兵 思ひがけない小兵衛。

りく 硯の在り所が知れてあるとはえ。

小兵 すなはち己が持つて居るのぢや。

半兵 アノ、硯を。

小兵 半兵衛が身の上が無ければならぬ、欲しがつて居る代物。外へ賣るも合點なれど、それでは難儀であらうと、わざ／＼爰へ持つて來た。

半兵 ムウ。すりや此間から己がさま／＼尋ねて居る
小兵 若菜の硯を。

ト序幕の袋入りの硯を出して見せる。

りく それを。

トちよつと寄るを

小兵 イヤ、それから御覽じろ。(ト硯を持ちかへ)何と半兵衛。買はずばなるまい、代物であらうがな。

半兵 して、其硯は、どうしてお身が手に入つた。

小兵 拾つた。

半兵 ヤ。

小兵 しかも四五日前、四條河原で拾つた此硯。おれが持つて居ても回向場の戒名、附ける間に合はぬ式部形の若菜の硯。望みてなくば、此北野に出して居る、干し店へても賣らうか。

半兵 イヤ、半兵衛が望みの硯、きつと買はう。必ず外へは

小兵 ハテ、目ざして賣りに來た代物、爰てよければ己も勝手。値段は即ち

半兵 そりや後で、とつくりと應對せう。

りく そんなら、こちらの人、あの佐市様へ

半兵 サア、それで申し譯が。(ト佐市に向ひ)申し、佐市様、斯うなる上は何を隠しませう。主人彦三一且買ひ求めし硯なれど、ちつと仔細あつて大切な硯を失ひ、それゆゑ今まで延引。お聞きの通り硯の在所も知れたる上は、金子調達仕り、買ひ求めてきつと差上げませう。とても儀に今暫らく御用捨を。

佐市 成程。彦三が噂、身共もさうと推量致せしゆゑ、今日までも日延べ、聞届け遣はしたれば、此上は半時一時の遅速は申さぬ。後程までに、きつと差上げたがよい。

半兵 エ、有り難い。さやうなれば、ノウ、女房ども。

りく サア、見苦しいとも、奥へござつて

佐市 イヤ、此家待つては、夫婦の心遣ひも氣の毒。館へ歸り、相待ち申さう。

半兵 さやうなれば、きつと後程。

佐市 最早相違もあるまい。

半兵 何の違ひが……御苦勞にござります。

佐市 然らば半兵衛、後刻、

半兵 お目にかゝりませう。

ト合ひ方になり、佐市、家來を連れ、向うへ入る。おりくこなしあつて

りく こちらの人の、此上は、ちやつとあの硯を

ト顔にて小兵衛を教へる。

半兵 そりや合點ぢや。(トこちらへ来て)小兵衛とやら、いよく其硯を買はうが、シテ、代金は。

小兵 サア、千兩ともいはれまい。若菜の硯、相場は知れた三百兩。

半兵 ヤ。

小兵 高けりや餘所へ持つてゆかうか。

半兵 イヤ、三百兩が五百兩でも、買はねばならぬ其硯、減多に外へは、賣らす事はならぬてや。

小兵 今の侍ひとの議定では、こりやさうありさうなものぢや。

ト小兵衛もこなしある。向うより健兵衛、男二三人連れ出て

健兵 サア爰ぢや。(ト皆々を連れて入り)サア、出してもらはう。

ト持つてやかましよういふ。

りく お前方は大勢ざわくと、出してもらはうとは、何の事ぢやぞいなア。

徳兵 何の事とは、おりや祇園町の井筒屋徳兵衛といふ者、小吟が親方。昨夜小吟が駈落ちした。今朝から尋ねあるいて、やうく紐が附いた。聞きや、深間の彦三は、爰な親方筋ぢやさうな。それで爰に隠まうてあらう。小吟を早う出してもらはうといふのぢや。

りく サア、小吟さんは

徳兵 知らぬとあれば、家探し、ても、連れてゆかにやならぬぞ。

りく モシ、こちの人。聞かしやんしたか。

半兵 ハテ、知れてある。女郎屋のお定まりぜりふ。身受けさへすりや事は済む。うっちやつておきや。

りく サア、其身を……エ、コレ、兄さんはどうして遅い。これぢやによつて……つんと辛氣な事ではある。(ト思ひ入れ)。

徳兵 コレ。減多にうっちやつてもらはうまいぞや。此方は大勢の奉公人、連れて歸つて勤めさせにや、親方の口が干あがるワ。

半兵 女郎は賣り物。金出して身受けすりや、言ひ分はあるまいがな。

徳兵 サア、身受けしてもらへば言ひ分はないが、小吟が身の代三百兩、受取らうかい。

半兵 今は無い。後に渡さう。

徳兵 イヤ、後といつても程が知れぬ。しつかりとした事を。

半兵 そりや聞き入れた。そんなら、暮六つまでに金拵へて、きつと渡さう。

ト此うち小兵衛葺のんで居る。

小兵 イヤ、半兵衛。おれが商ひ、硯の代金三百兩は。

半兵 それも一所に、暮六つまでに。

小兵 兩方合せて六百兩。

りく 暮六つまでに、こちの人。

半兵 ハテ、金は湧き物。案じる事はない。

りく それでも、どうやら

半兵 サア、苦勞に、イヤ、黒木屋の番頭、千兩萬兩も振りまはす此半兵衛。

徳兵 成程、さういふ事なら暮六つまで、ちつとの間待つてやらう。

小兵 おれも其うち。

ト立ちかけるな

半兵 減多に歸さぬ。こちの内て待つてもらはう。

小兵 宿無しのおれ。そりや勝手ぢや。

徳兵 おれも幸ひ、近所に居て、此向ひの、觀通寺といふ禪寺の、鐘が鳴つたら取りに来るが、合點かえりく春の日足は長けれど

半兵 屈托あれば、短かう覺える。

小兵 退屈ながら、奥で待たうか。

半兵 初めてなれば、案内せう。

徳兵 そんならいよく、暮六つまでに

半兵 エ、しつこい。小兵衛、ござれ。

ト唄になり、半兵衛、小兵衛を連れて奥へ入る。徳兵衛も男を連れて、しつこくあつて向うへ入る。跡におりく残り、思ひ入れあつて

りく こちの人が減多無性に、受合はしやんした兩方の金。といつても六百兩。なんぼう母屋は黒木屋でも、これまでさへいはれぬ小吟さんの身受け。有りあまるお身の上でも、彦三様のお馴染の女郎さんを受出すとは、どうも親御大隅様はもとより、嫁御お路様の手前、遠慮していはれせず。せめてわたしが身受けしてと、内證で兄さんとの相談。これもこちの人の苦勞を、少しでも休めた

さ。……それにマア、此兄さんは、なぜ来て下さんせぬことぢや知らぬ。

トこなしある。てんつゝになり、向うより新兵衛、着附け、羽織にて、駕を一挺吊らせて出て、門口へ来て

新兵 コレ、駕の衆。どうでもちよつと暇どるであらう。此切り戸から入つて、臺所の方に、待つて居てもらはう。

駕昇 ハイ。そんなら、此切り戸から

新兵 よい時分に知らせます。

ト駕昇きは切り戸の中へ入る。新兵衛は内へ入り

新兵 妹。さぞ待ちかねたであらう。

りく 兄さん。よう来て下さんしたなア。

新兵 其方の方から来た状を、見るとすぐに此方へ行で、無理やりに頼んで、マア、何がなしに此松の尾新兵衛が顔づくて、今の物も拵へた。

りく そんならわたしが、いうた通りに

新兵 ソレ、三百兩。

ト財布入りの金を出して渡す。おりに取つて
りく 兄さん。段々のお世話、忝うござんす。

ト戴く。新兵衛こなしあつて

新兵 妹、何が忝い。おりや口惜しいわいの。

りく エ、。

ト合ひ方になり、新兵衛、おりに顔見合せて

新兵 サア、其方も己も生れた時は、松の尾で、一と二と下らぬ造り酒屋、親仁様が死なしやつてから、米のとたんに手代の引負ひ。身上もしもつれて、處を立退き、今では己は髪結ひ。其方は寶町の筒井へ奉公。縁てがな、親方の仕つけにて、半兵衛と夫婦になり、此北野の住居。ところに、夫のお主の娘御、どうも勤めはさしておかれぬと、祇園の店へ來ての詳しい話し。身受けの金は三百兩。其代りにはわが身を苦界にへトおりに引寄せ、愁ひの心にて、かいたしよの無い兄を持つて、たつた一人の妹に、勤め奉公さすと思へば……エ、けいたいな、商賣が髪結ひゆゑ、額へ毛抜きはあつれども、おりや男てはないわいの。

ト顔をそむけて思ひ入れ。おりにこなしあつて

りく 眞實の兄さんなりやこそ、わたしが事を其やうに……ふた親は死なしやんす。頼りに思ふはお前と、こちらの人半兵衛殿。其半兵衛殿のお主の娘御のお爲に、身を沈めるはわたしが本望。必ず案じて下さんな。こちらや悲しいとも、辛いとも、何とも思やせぬわいなア。

新兵 サア、其やうに立派にいふ、心の中が……イヤ、これも無駄な繰り言。何事も時世といへば、世界に無い習ひでもなし。

りく 山川の、底に流るゝとちがらも、身を捨てゝこそ浮む瀬もあれ、といふ歌もござんすれば。

新兵 役にも立たぬ述懐は取りおいて、妹、其方の頼みなれば、懇ろにする島原の桔梗屋へ、突出しの相談で、三百兩、年のところは其方が入込んだ上、ぢきに相談と、マア金が急ぎゆゑ、くはしい事は後と、迎ひの駕を連れて、持つて戻つた其金、早う役に立てゝ、其方も桔梗屋へ行かずばなるまい。

りく そりや覺悟の前。爰に一つの難儀は、小吟様の身受けは、お前の世話で此金で方附けど、又、彦三様の命にかゝつた、若菜の硯。今日幸ひ賣りに來たが、これも三百兩。

新兵 ムウ。そんなら、外に又三百兩。

りく 暮六つまでに調はねば、こちらの人の矢ッ張り身の上。

新兵 暮六つまでとは、何をいうても急な事。

りく どうぞ仕様はござんすまいか。

新兵 力業にも、腕づくにも、ゆかぬやつは金。

りく 母屋にはたんとあつても、一昨日のもや／＼から、藏の金に封印が附いて、親旦那のお預り同然。

新兵 引受けて戻つた半兵衛が、心當ても違ひ、こりや今になつて當惑であらう。

りく 兄さん。

新兵 妹。マア、思案をして見ようか。

りく 其間にわたしは髪結び直して

新兵 賣り物に飾る花。

りく 盡きぬ名残りはこちの人。

新兵 行きともなからうと思へば、

ト顔見合せ、ホロリとするを

りく なんの、人の行かぬ處ではなし、桔梗屋へ行たら随分派手に、揚屋入りの道中とやらも

新兵 ヤ。

りく オ、恥かし。

ト思ひ入れあつて、顔に袖をあて、涙を隠す。唄になり、二人奥へ入る。中二階の障子を明けて、小吟、

女郎の形にて、そろ／＼下りて来て、こなしあつて

小吟 今奥で半兵衛がいやつた、彦三様は押入れにござるとやら。爰へ来て内の勝手は知らぬが、押入

れはどこやら。

トあたりを見廻し、正面の押入れを見附け

嬉しや、大方あの中。さうぢや。

トつか／＼と行つて、押入れの下方、間平戸を明ける。中に彦三忍び居る體にて

彦三 ヤア、思ひがけない、其方は小吟。

小吟 彦三さん。わたしやお前に逢ひたさに

ト中へ入らうとするを

彦三 イヤ、滅多には逢はれぬ。

ト小吟を突き出し、まひら戸をピツシヤリと中より閉す。外にて

小吟 エ、何の事ぢやいなア。折角お前に逢ひたさに……コレ、申し、いはねばならぬ事がござん

す。どうぞ爰を、エ、

ト無理にまひら戸を引明け、押入れの中へ入り、跡をたてる。彦三上の方のまひら戸を明け、一獨り出て
彦三 ちよつと様子を聞けば、駈落ちして来たといふ小吟。わざと逢はぬも、未練を起さすまいため、
此身の

ト此うち上の方のまひら戸を明け、小吟出て

小吟 彦三さん。それではお前

ト取りつくを

彦三 ハテ、一つに居ては、半兵衛夫婦が難儀。

ト振り切り、下のまひら戸を明け、押入れへ入る。

小吟 エ、それでも

ト又小吟も追ひかけ、下のまひら戸を明けて入る。彦三又上のまひら戸を明け出る。引續いて小吟も出
て取りつくを、彦三又振り切り、下のまひら戸を明け、押入れへ逃げて入る。又小吟も追ひかけ、下の
まひら戸を明け、押入れへ入る。又、彦三上のまひら戸を明け出る、小吟追ひかけ出て、やうく彦三
に纏り付き、留める。此うち向うよりお路出て来て、内へ入らうとして此體を見て、門口に様子を聞いて居る。小吟こなしあつて

小吟 エ、聞えませぬ彦三様。お前に別れた其晩に、河原に醫者の宥宅が、殺されて居たを、誰がい
ふともなく、お前が斬つたと、人の噂を聞きたびくに、さしこむ癪。それから何の便りもして
下さんせず、どうかかうかと案じてばつかり。あんまり逢ひたさに、恐ろしい親方さんの内を忍
び出て、昨夜やうく、爰まで尋ね迷うて、お前に逢ひに來たわいなア。

彦三 小吟。これまで互ひにいひかはした、義理を思つて駈落ちした、其方の志しは嬉しいが、人の噂
も天の網。宥宅を殺したは此彦三。

小吟 エ、

ト惻り。彦三もこなしあつて

彦三 サア、これも段々と譯のある事。人殺しの科人と、とくより覺悟は極めて居れど、養父、實母の
お嘆きを思ひ、殊には半兵衛が深切に引かされ、暫く此家に忍んでをれど、どうせ此世になき身
の上。

小吟 サア、其お前のお心を聞く上は、わたしも共に、コレ、これを見て下さんせ。

ト剃刀を二挺出す。彦三取つて

彦三 こりやコレ剃刀。そんなら其方も

小吟 わたしが磨く心の刃。まさかの時はお前と一所に、死ぬる覺悟でござんすわいなア。

ト思ひ入れあつて泣くところへ、お路つか／＼と入り、彦三が持つて居る剃刀を引き取る。

彦三 ヤア、其方はお路。いつの間に

小吟 エ、そんならあなたが

みち アイ。彦三の女房、路でござんす。お前が小吟さんぢやなア。(ト下に居て、小吟の胸ぐらをとつて) 胸慾なお心でござんすなア。此剃刀で彦三様と、御一所に死なうとは、聞えませぬ。どうぞあなたを殺すまいと、父様や實の母様を始め、半兵衛殿、わたしまで、並大抵な心遣ひぢやござんせぬわいなア。今日も今日とて彦三様の、御無事を祈りに、此北野の天神様へ、お千度打つての歸りがけ、思はず見つけた此剃刀。思へば有り難い、天神様の御利生。大事の、彦三様を、一所に殺す事はなりません。死にたくば、お前一人死なしやんせ。なんぼかまはぬ阿呆なわたしぢやとて、人の殿御をしたいがいに、エ、あんまりでござんすわいなア、小吟さん。

ト思ひ入れあつて泣く。

小吟 お路さん。堪忍して下さいませ。何といひ譯もない其お怨み。御尤もでござんすが、浮き河竹の身の上さへ、格氣嫉妬は女子の常。それに引きかへ彦三様を、大切に思つてござんすお心から、こ

れまでわたしへ問ひおとづれのお女まで、下さんしたお前ぢやもの。なんの仇に思ひませうぞ。さりながら、人を殺せば解死人と、それが悲しさ。もし死なしやんすなら、わたしも共にと、用意した其剃刀は、これまでお情けの御恩送りに、命を捨てるわたしが覺悟。お前の御縁は妨げませぬ。今お顔を見れば、わたしが本望。モシ、コレ、お路様。彦三様。お禮は未來から、おさらば。

トお路が持つて居る剃刀を取つて、死なうとするを留めて

みち コレ、待つて下さんせ、小吟さん。義理にも命捨てうとは、嘘にはならぬ。其心底を聞く上は、わたしもさら／＼、お前に怨みはござんせぬわいなア。

小吟 イエ、其お詞を聞く上は、どうしても死なねばならぬお前への義理。留めずと殺して下さいませ。みち ハテ、好き合つてござんすお二人さんは、矢ッ張り無事で添うて下さんせ。彦三様の代りに、死ぬるはわたし

ト剃刀を取つて死なうとするを、彦三留めて

彦三 イヤ、待て、お路。其方も死ぬるに及ばぬぞ。

小吟 さうでござんす。死ぬるはわたし。

トお路、小吟、死なうとするを、兩方をしつかりと留めて

彦三 コリヤ。小吟も、お路も、なんて死ぬるぞ。

小吟 お前の代り、宥宅が解死人。

みち 其解死人は此お路。

彦三 イヤ、二人ともそりや無駄死。四條河原の人殺しは、此彦三と洛中に、噂のある知れた科人。其代りに女子の其方達が、たとへ死んでも天下の政道。さてはさうかと己が身が、通れさうなものが、助かりさうなものかと、コリヤ、思うて居るかいやい。

兩人 エ、。

彦三 男の己が爲せし罪、それさへ今に得死なぬ。浮世の義理に搦まれて、屠所の羊の行き悩み、死ぬるよりは生きて居る、心の中の苦しみは、マア、どのやうにあらうぞ。

小吟 サア、それも親御のお嘆き、

みち 半兵衛殿夫婦の志し。

彦三 義理といふ、其義理こそは義理なくに(？)

兩人 義理に上越す、

彦三 義理はあるまじ。

ト三人思ひ入れにて泣く。ゴーンと七つの鐘鳴る。

三人 ヤア、あの鐘は。

ト半兵衛兩手を組み、思案しい／＼、うつとりと奥より出て

半兵 日足もだん／＼傾き、もう七つ。

彦三 ヤア、半兵衛。

みち そんなら、わたしらが今の

トこれにて半兵衛心付き、三人を見て、ちやつと思ひ入れあつて

半兵 ア、酔うたく。怪しからず食べ酔うたぢや。

トわざと生酔ひのこなしにて、ひよる／＼と前へ出て

こりや若旦那。小吟様。イヤ、こちらにごさるはお路様。よくいらつしやりましたな。わざとも

お前を呼びにあげるところ、幸ひ／＼。

彦三 コレ／＼、半兵衛。幸ひとは。

兩人 何が幸ひでござんすえ。

半兵 さてはお三人とも、様子を御存じござりませぬか。

彦三 そりや何の様子を。

半兵 そんなら女房おりくめが、まだ何も申しませぬか。エ、彼奴も酔うて、どぶさつて居るかしらぬ。

彦三 おりくには、まだ何にも聞かぬが、常と違うて機嫌の體。

みち 殊に、酒に酔うて居る半兵衛殿。

小吟 どういふ様子ぢや。ちやつと

兩人 わたしらにも。

半兵 聞かませう。聞かさにやならぬめてたい様子。其おめてた酒を食へ過ぎて、甚だ酩酊。酔うたぢや。酔うたによつて申しあげるぢや。

彦三 シテ、其様子は。

半兵 まづ、お喜びなされませ。彼の若菜の硯が、手に入りました。

彦三 ヤア、思ひがけない。行き方知れぬ若菜の硯が、ど、ど、どうして手に入つたぞ。

半兵 サア、天の與へと、最前さる者が賣りに参りましたゆゑ、すぐに求める堅い約束を、桂佐市様も最前催促にござつて、とくとお聞きなされて、今日差上げる事承知して、即ち御所へお歸り。暮

六つまでに三百兩。(ト又生酔ひになつて) さ、さらりと埒が明きました。

みち そんなら彦三様の、お身の上に

半兵 かまひは無し。元の黒木屋の若旦那。

彦三 エ、嬉しや。硯が手に入つたとは、それで安堵。

小吟 さぞ親御さん達も、お喜びでござんせうなア。

半兵 左様々々。まだお喜ばせ申す事は、我等故主の娘御、此小吟様も、最前親方が渡りに来て、イヤわざ／＼呼びにやつて、だん／＼の詰め開きて、これも身受けして誰憚らずに、お路様は御本妻、此お子は妾。なんと、若旦那。何もかも納まつて、めてたいぢやござりませぬか。サ、めてたい／＼。祝うて一つめませう。お前方も一所に、サア。(ト手を打たうとして、三人を見て) これはしたり。どうぞござります。お三人とも矢ッ張り其やうにじめ／＼と。エ、こりや又寄り合うて、役にも立たぬ悔みいうて、泣いてござつたな。

彦三 なんの、さうではない。ナウ、お路。小吟。(ト目顔で知らず)

兩人 アイ。さうでござんすわいなア。

半兵 イヤ／＼、泣いてござつたぢや。ソレ、目が腫れてある。モシ、お前方も必ず死ぬる事はなりま

せぬぞ。

兩人 エ、。

半兵 イヤサ。若旦那と同じやうに、又してもく、死ぬるの、覺悟のと、お前方を殺すまい爲に、此半兵衛が五臓を絞る。術ない……サア酔うて術ない酒の科。此上は暫く爰て風に吹かれて、酔ひを醒まさねばならぬ。お三人とも御遠慮はない。お路様は元より、小吟様も久し振り、奥へ行てしつぽりと、サア、斯う手に手を取つて(ト彦三に兩人が手を無理に引かせ)わつさりとお前方も、酒々。彦三 イヤ、それでもどうやら、今の詞の端々。

兩人 わたしらにまで嘆きをかけまいと

半兵 ハテ、酒の酔ひ本性たがへず。滅多に違ひはござりませぬ。

三人 それでも

半兵 エ、、ござりませぬ。

ト腰にてわざとをかしう三人を突きやる。唄になり、彦三思ひ入れ。小吟、お路もこなしあつて、心の濟まぬ體にて、せう事なしに奥へ入る。合ひ方になり、半兵衛跡に残り、思ひ入れあつて

半兵 若旦那を始めお二人にも、案じさせまいと、わざと飲まぬ酒に酔うた振り。面白をかしういふ心

の中は早鐘。今のは七つ。もう一時に六百兩……常なれば、六百兩が千兩でも、彦三様のお爲、親旦那に申し上ぐれば、すぐに金は調へど、此節疑ひかゝりし彦三様の人殺し。これも三日とお願ひ申した此半兵衛。いひ譯立つまでは、黒木屋の家内は勿論、金藏にも代官所の封印が附いてあれば、粒三文の才覺も……エ、、何もかも。(ト思ひ入れあつて)ぢやというて、六百兩を急に

ト又兩手を組み、ぢつと下に居て思案するところへ、奥より小兵衛、欠伸しいく、出て

小兵 ア、ぐつすりと一寐入りやつた。(ト半兵衛を見て)オ、、半兵衛、今の先き鳴つた鐘は

半兵 ムウ。ありや觀通寺の七つ。

小兵 おりや暮六つだと思つて起きたが、約束までには、もう一時はあるまいが、大方、金は出來たてあらうの。

半兵 サア、其金は……マア、大概は出來た。

小兵 そんなら受取つて、硯を渡さうか。

半兵 ヤア。

小兵 サア、尤も議定は暮六つなれども、間の無い事。早う受取り渡しする方が、其方の爲にも勝手がよからうが。

半兵 そりや勝手はよいが、何をいうても肝心の三百兩。

小兵 ヤア。

半兵 イヤサ、金は出来る。暮六つまでには、きつと三百兩拵へて、若菜の硯、受取らにやならぬ。

小兵 イ、ヤ合點がゆかぬわえ。てまへが今の五音では、暮六つはおろか、明六つまでか、つても、出来さうもない。こりや無駄な事に手間どらうより、歸る方がよからうわい。

ト表へ出ようとするを、半兵衛引き廻して

半兵 待て、小兵衛。暮六つまでとは男づくの議定。其刻限も来ぬうちに、變替へとは。町人なれど黒

木屋半兵衛。減多にさうは得させまい。

小兵 成程。こりや尤も。男の一旦議定した事。オ、さうだ。爰て待つは退屈な。それで内へ歸つて待つて居る。金が出来たら、暮六つには限らぬ、何時でも硯を取りに來い。

半兵 ムウ。シテ又、其方が住所はどこぢや。

小兵 ハテ、知れた河原の蒲鉾、イヤ、河原町か、河東か、烏丸通り、どこでも行きつきばつたりに、氣の向いた處が居所ぢや。

半兵 さういふ身の上なれば、猶歸されぬ。退屈ながら今暫く、矢ッ張り奥で待つてもらはう。

小兵 そりや否ぢや。

半兵 ヤ、なんと。

小兵 生れついて此小兵衛は、片時もちつと尻を据えてゐる事が大嫌ひ。達磨同然。そこで坊主小兵衛。今、金渡さにや、居所の知れぬ己が内へ取りに來い。どこぞで待つて居ようわい。

ト又行かうとするを、半兵衛引戻して、入れ替つて、門口の戸をピツシヤリさして

半兵 否であらうが、嫌ひであらうが、是非己が内へ待つてもらはう。

小兵 すりや、どうあつても、おれを歸さぬのか。

半兵 ハテ、暮六つまでと議定して、今更變替への仕様が無さに、歸つて待たうとはどこへ。宿無しの方主小兵衛。たとへ此方に金が出来ても、居所知れぬ雲をあて、尋ねるうちをまごつかせ、外へ値賣りをせうと思ふ、こりや慾心がきざしたな。

小兵 オ、推量の通り、何時でも五百兩や三百兩にはなる代物。暮六つというても、どうやら心元ない。それで寧ろ脇外よりは、梅園家へ持つて行て、ぢきに賣りかけたならば、よもや買はぬといふ事はあるまい。それで一走り梅園家へ。

半兵 イヤ、そりや猶やられぬ。ぢきに梅園家へ賣られては、此半兵衛がいひ譯が無い。

小兵 そんなら汝が買ふか。

半兵 ハテ、暮六つまでに。

小兵 イ、ヤ、もう一寸も延されぬ。今、金を渡さにや、此方へ賣らう。

半兵 そりや又あんまり

小兵 無理合點。早い賞翫。

半兵 ぢやというても、

小兵 金は出来ぬか。

半兵 サア、それは、

小兵 サア、

半兵 サア、

兩人 サア〜〜、

小兵 所詮、金は出来まいがな。

半兵 エ、。

トこなしあつて思ひ入れある。中二階よりおりく出て

りく こちの人。一口の三百兩。ソレ。

ト投げる。半兵衛胸り、取上げて

半兵 ヤア、此金は。どうして女房。

りく 様子は後で

ト障子をピツシヤリ。半兵衛ムウとこなしあつて

半兵 サア、約束の三百兩。小兵衛、硯を受取らう。

小兵 成程、渡さう。これを待つて居たのぢや。

半兵 なんと、これでも梅園家へ、直き賣りに行くか。

小兵 イ、ヤ、行がぬ。今のやうに仕掛けぬと、此金が出来ぬ。それで、あ、せぐりかけて、早く埒を明

けうといふ巳が算段。又商賣々々で、よく書いたであらうがな。

半兵 エ、男のやうにもない。流石は……イヤ、何をいうても蛙の面へ水であらう。サア、金渡す

から、硯を早う。

小兵 オット、急ぐまい。えてこんな時には銅脈を搦むものだ。マア、とつくりと改めてから、硯を渡さう。

トいひ〜、財布より三包みを出し、一包みを解き

いうても三百兩。数が多い。暫く〜。

トこれより三味線入り、静かなる禪のつとめになり、小兵衛、金を一兩々々静かに改める。半兵衛禪の勤めを聞いて

半兵 ありやもう觀通寺の夕刻の勤め、もう暮六つに間が無いが、小吟様の……それよりは今女房が思ひがけないあの金を、どうして拵へた事か。これも氣が、り。ハテ。

ト思ひ入れある。此うち小兵衛改め、元の通りに包み、下に置き、又百兩取上げ、段々手早く改める。此うち始終禪の勤め、新兵衛奥よりツツと出かけ、小兵衛が改めた金を一包みづ、摺り換へる。半兵衛は思案して居る。小兵衛三百兩ながら手早に改め、元の通りに包んで下に置く。新兵衛残らず摺り換へ、戴いて奥へツツと入る。小兵衛これを知らず、財布に入れ、紐をしい〜

小兵 少々切れはあれど、正金に違ひはない。

半兵 サア、硯を受取らう。

小兵 ハテ、忙しない。(ト財布を懐へしつかりと入れ、硯を出し) ソレ、約束の、若菜の硯。

ト渡す。半兵衛開き見て

半兵 聞き傳へし双轡の影り物に、二つ並びし式部形。これに違ひはないであらう。

小兵 何の違ひがあらう。

半兵 まづ、硯は手に入つた。(ト懐へしつかり入れ) これからは此方の、これも三百兩。(ト小兵衛を見てきつと思ひ入れあつて) お主の爲。ハテ、どうせうなア。

ト始終小兵衛に目を附けながら、ザツと下に居る。小兵衛もこなしあつて

小兵 半兵衛。硯は渡す。金は受取る。もう用はあるまい。さらばお暇申さうか。

トこれより長吉殺しの合ひ方になり、小兵衛懐る手にて、そろ〜と花道へかゝる。半兵衛、さうぢやとキツとなつて立上り、脇差し取つて来て手早に差し、花道へツカ〜と行て小兵衛を後ろ抱きに抱き留め

半兵 待て、小兵衛。ちよつと待つてたも。

ト小兵衛がまはさず手を出し、半兵衛が兩手をとらへ、振り返り、矢張り花道にて

小兵 半兵衛。巳を後ろ抱きに抱き留めたは、何の用ぢや。

半兵 サア、其用といふは、爰は道中。どうもいはれぬ。マア、内へ立歸つてたも。

小兵 イヤ、おりや聞く用は無い。

ト振り切り、行かうとするを、半兵衛立廻つて向うより留め

半兵 サ、其方に用は無うても、此方に用がある。手間は取らせぬ。マア、平に〜。

ト舞臺へ来て、内へ突き搦ふ、門の戸ピツシヤリ閉す。此うち始終土弓入りの合ひ方、最前の駕におり

く乗つて、新兵衛附いて納戸口より出て、花道にて駕立ちどまり

新兵 コレ。ちよつと暇乞ひを

りく イヤ、未練が起れば……それよりは小吟さんの

新兵 身受けは承知。

りく さはいへ、半兵衛殿に

新兵 ヤ。

ト思ひ入れあつて、おりくが顔を見る。

りく 駕やつて下さんせ。

ト垂れをおろす。新兵衛もこなしあつて向うへ入る。内ではこれを知らず

小兵 半兵衛。巳を内へ連れて戻つたは、何の用ぢや。きりくいはぬか。

半兵 サア、其用といふは、悪黨の貴様に、半兵衛が一生の無心。最前貴様も聞いた通り、小吟殿の身

受け、これも暮六つの手詰めなれば、もう追つけ取りに来る。何を隠さうぞ、小吟殿といふは、巳

が以前の故主の娘御。今の主人の彦三殿と、深っいひかはして外の客を嫌ひ、親方を駈落ちして、

此方の内に取り込んでおいたも、此半兵衛が偽には、外ならぬお二人の身の上。添はれねば死ぬ

るはこりや知れた筋。最前親方が来た時分、身受けする、暮六つまでに金取りに来いと立派にい

うたが、有りやうは金が無い。尤も母家は黒木屋、名におふ洛中で知れた身の上。藏には有れど、

此節ちつと譯があつて、家内に封印。それで手づかへた金の工面。今貴様に渡した其金も、どう

して拵へたか女房が働き。硯は首尾よう手に入つたが、また身受けの金が手づかへゆる、近頃わ

りない無心なれど

小兵 此三百兩を、貸してくれいといふのか。

半兵 サア、長うとはいはぬ。僅か二三日の間。

小兵 若菜の硯は其方へ捲き上げて

半兵 サア、一旦買った此硯を返しておいて、金を此方へといふが道なれど。此硯も無ければならぬ命

づく。假名でいへば、硯も借り、金も借りる半兵衛が無心。

小兵 そんなら硯も返さずに

半兵 金を貸せとは、無理といはうか、非道といはうか。そこが裁けた小兵衛、汝だけ、無理と知つて

頼んで見るも、巳は素人、黒木屋の番頭。貴様は立人、坊主小兵衛。サア、萬一間違うても、取

る事に如才の無いと、これも見くびつていふのではないが、おれが心を打割つて、いって見づく